393
Ki24

0056705000

0056705-000

３９３－Ｋｉ２４ウ

戦争と建設

菊池春雄・著

新東亜協会

昭和１７

AJD

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第６７条の規定に基づき、平成１２年５月
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

393
K124

戰爭と建設

馬池春雄著

393
KI 24

戰爭と建設

企畫院調査官 菊池春雄著

序

滿洲事變と滿洲國建設、支那事變と新支那建設、大東亞戰爭と大東亞建設と、こゝ十年あまりといふもの皇國日本の動向は、舊き世界にさきがけて、戰爭と建設の聖なる營爲に精進しつゝある。そして、ナチス政權確立以來のドイツの動きは、建設と戰爭の立體像をなしてゐる。いはば戰爭と建設、建設と戰爭といふ一聯の觀念のうちに、われわれいとも明瞭に、新しき世界への曙、清鮮な息吹きを感ぜずには居られないのである。

米英に宣戰を布告し給ふた大詔が、われわれ一億皇民の魂を搖り動かし、み民われと感激せしめてこゝに一年。世界を根本から維新せしむべき八紘爲宇の天業は戰爭と建設の道義性に溢れた、しかも逞しい姿をみせて、變轉きはまりない世界の動きに一筋の光明を示しつゝある。われわれ感奮せざらんとしてあたはずである。

この感奮のまにまに、あへて菲才をかへりみず、若干の感想、覺書をあつめてこゝにさゝやかな「戰爭と建設」の書をつくる。

もとゝ、論說とも隨筆ともつかず何といふことなしに、書きしるしたものなのでいたつてまとまりのないものであるが、手にされた讀者にして（ことに若い人々が）このうちから、何かしら共感していたゞけるものをひろはれたならば、著者としては、もうそれだけで、望外の喜びに堪えない次第である。

957
87

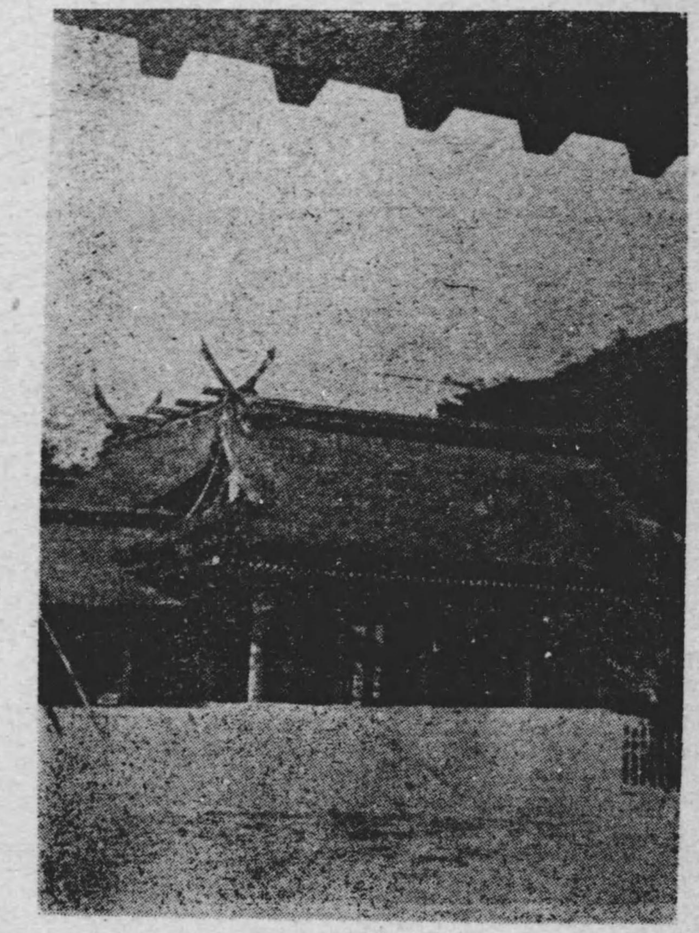
因みに、本書の構成は、十餘篇の單文の集まりになつて居るが、かならずしも

一篇一篇を一頁から、系統だてゝ讀まれる必要なく、それ〴〵どの篇でも、どの篇からでも隨意に翻讀されたい。

大詔奉戴一週年を迎へんとして誓ひ新たなるの日、

昭和十七年十二月三日

著者しるす



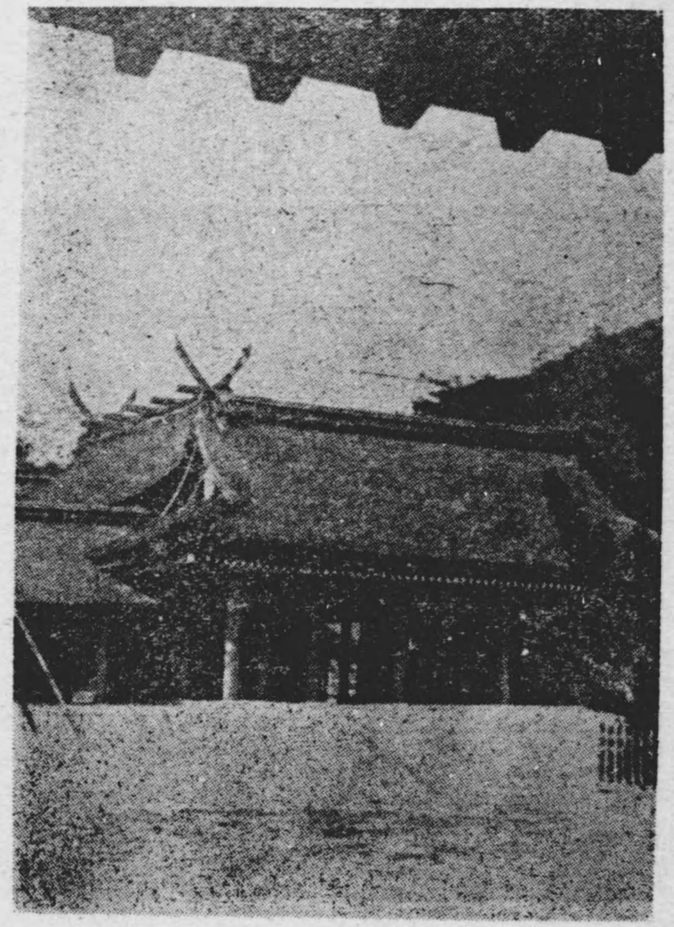
（寫眞は陸軍省檢閲濟）

一篇一篇を一頁から、系統だて、讀まれる必要なく、それ〴〵どの篇でも、どの篇からでも隨意に飜讀されたい。

大詔奉戴一週年を迎へんとして誓ひ新たなるの日、

昭和十七年十二月三日

著者しるす



（寫眞は陸軍省檢閲濟）

橿原神宮

英國東亞侵略の牙城シンガポールを攻撃するわが砲兵隊

新しき香港建設に
協力する印度人

ソヴィエト聯邦の要衝ドニエプロペトロフスクに向ひつゝ猛進中の軍隊

ナチス黨大會において
ヒトラー總統の前を行
進するドイツ・アルバ
イッデイーンスト
（勞働奉仕團）

生産戰爭の第一線にて健鬪する日本女性

戰爭と建設

目次

第一章、戰爭と建設……（一）
第二章、世界觀の戰爭と建設……（三二）
第三章、日本的世界觀とナチス的世界觀……（五五）
第四章、大東亞の戰爭と建設への歩み……（八二）
　その一　皇國史上の對外戰爭……（八二）
　その二　英米の東亞侵略……（九七）

第五章、日本國防國家の綱領……（一二〇）
第六章、ナチスにおける戰爭のための建設……（一六六）
第七章、ナチス國防經濟建設の歩み……（一九四）
第八章、生產の戰爭と建設……（二二九）
第九章、民族力の戰爭と建設……（二五〇）
第十章、生活の戰爭と建設……（二七〇）
第十一章、われわれの誓ひ……（二九八）

戰爭と建設

戰爭と建設

戰爭と建設！

まことに、世界の動きは、つきつめれば、簡潔なこの一句で表現しつくせるやうに思ふ。

東の日本は、いまや、大東亞戰爭と大東亞建設のために、總力を擧げつゝある。

西のドイツは、いまや、歐洲建設のために、全力を振ひつゝある。

そして、この東と西の二つの國の營みは、決してなんらのつながりなしになさ

れてゐるのではない。

東と西とに隔つて行はれつゝあるこの戰爭と建設の營みは、いはゞ世界戰爭と世界新秩序建設といふ大きな楕圓形の二つの焦點をなしてゐるのである。

「戰爭と建設」といふ言葉ぐらゐ、新しい世界を標徵するに適した合言葉は、あまりないやうに思ふ。

大東亞戰爭は、すぐそのまゝ大東亞建設である。歐洲戰爭は、すぐそのまゝ新歐洲建設である。そして、世界戰爭は、すぐそのまゝ世界新秩序建設である。

戰爭が、そのまゝ建設である、といふとき、正直のところ、われわれの「戰爭」といふ言葉からうける感じには、なにかしら、胸のおどるやうな新鮮なものあるを否みえない。

われわれのなかには、戰爭といへば、すぐ、「破壞」といふことを聯想する人

がないであらうか。

事實、われわれも、戰爭といへばそのまゝ破壞と敎へられなかつたであらうか。

戰爭は、文化の破壞である、などといふことが、とくに、大きな聲で、叫ばれはしなかつたであらうか。

しかし、いま、われわれは、あげて、「戰爭と建設」といふ一聯の表現に、大きな時代の息吹きを感じとつてゐるのである。

われわれには、どうしても、「戰爭」といふ言葉の意味が、大きく變つたのだ、としか考へられないのである。さうでなければ、「戰爭と破壞」といふ言葉を、そのまゝ「戰爭と建設」といふ言葉のパラドックス的な表現にすりかへて、平氣でゐるはづはないからである。

さうだ、「戰爭」といふ言葉のもつ意味合ひが、大きな時代の歷史の流れで、

見事に、脱皮したのだ。――つまり、われわれは、戰爭觀に大きな革新を經驗してゐるのである。

× ×

われわれは、われわれの現に戰ひつゝある大東亞戰爭が、大東亞建設のための、大試練である、といふことを考へると同時に、大東亞建設といふこと自體が、はたして、大東亞戰爭後の、いはゆる戰後經營のやうなものと考へられていいかどうかをまじめに反省する必要がある。反省してみれば、大東亞建設といふことも、また、廣い大きな意味での大東亞戰爭のなかの一形相であることに、すぐ氣づくはづである。

同じことは、歐洲戰爭と歐洲新秩序建設といふことにもいへるであらう。そしてまた、世界戰爭と世界新秩序建設といふことについても、むろん、考へられることである。

新しい言葉としての「戰爭と建設」の意味は、われわれとしては、戰爭より建設へ、といふ推移的意味としてでなく、戰爭しつゝ建設しつゝ、といふ併時的意味として、理解さるべきではないだらうか。

いひかへれば、「建設戰」といふ言葉のまゝに、建設の一面にも戰爭がある、といふことである。

戰爭しつゝ建設しつゝ!!

建設しつゝ戰爭しつゝ!!

新しい世界が生れてゆくのである。舊い秩序に永年とぢこめられた大東亞と、歐洲と、そして世界が新しい大東亞と新しい歐洲と、そして新しい世界に生れか

はるのである。

× × ×

東の皇國も、西のナチスも、いまや、戰爭しつゝ建設しつゝある。いや、世界全體が、大きな表情をうちひろげて、まさに戰爭しつゝ建設しつゝある。そして、新しい世界秩序の誕生を前に、産みの惱みをつゞけつゝあるのである。

しかし、われわれは、この戰爭しつゝ建設しつゝある今日の段階が、その前に、戰爭のための建設をひかへてゐたことを忘れるわけにはいかない。そして、さらにまたその前に、建設のための戰爭が行はれたことを忘れてはならないのである。なぜなら、同じことは、今後といへども、繰り返へされるだらうからである。

戰爭のための建設を怠り、建設のための戰爭を回避する國家は衰へ、戰爭と建

設とによつて、まことの平和を望む國家のみ榮える。世界史における國家興亡の跡をかへりみるものは、この「戰爭のための建設」と「建設のための戰爭」といふ二つの契機によつてあやなされてきた大いなる歴史的事實に目を蔽ふわけには行かないのである。

戰爭のための建設が、一九三三年（昭和八年）以來のナチス・ドイツにおいて、最も理想にちかい形をとつて、營まれたことは、あまねく、人の知るところである。

第一次世界戰爭のために、その政治も、その社會も、その思想も、その經濟も、その文化も、ほとんどありとあらゆるものが、荒廢にさらされて、戰後の十五ヶ年間を苦惱のうちに過ごしたドイツが、この年の一月に、ヒトラーを首班としたナチス政府を戴いてからといふものは、月を逐ひ、年を重ねるごとに、みちがへる

ばかりの甦生を示した。そして、まことに、世界人から、ひとしく驚異として、目をみはられた。しかし、その驚異的甦生の實體の底をうちわつてみれば、その施策の一つ一つに、戰爭のための建設といふ目標が理念化されてゐたことが、われわれとしては、より以上の驚異とされねばならないのである。

新歐洲戰爭開始以來のドイツの强みが、すべて、この戰爭のための建設の成功に因るものであることは、あまりにも、判りきつた事實である。

ナチス治下七ヶ年、めざす戰爭に突入するまでのドイツは、その政治においても、その社會においても、その思想においても、その經濟においても、その文化においても、およそありとあらゆる國家生活の分野において、ことゞゝく、戰爭のための建設といふ觀點から、物を考へ、事を處理してきた。

戰爭のための建設——これを、われわれは、國防國家の建設といふ言葉で現してもいい。

われわれは、ナチス國防國家の建設のあとをふりかへつてみて、そこに、幾年かの間、力づよい世界甦生の一翼が溫められつゝあつたことを、ハッキリとみとめることができるのである。

溫められた翼は、いまこそ時を得て、歐洲の新秩序を生み落すべく、いとも雄大な羽搏きをなしつゝあり、そしてそれは世界新秩序建設といふ楕圓形の一つの焦點をなしてゐるのである。

× × × ×

そして、わが皇國日本の、大東亞戰爭突入にいたるまでの歩みは、どうであつたか。

大東亞戰爭に入るまでに、われわれは、支那事變を體驗し、そして、さらに、その前には、滿洲事變を經驗してゐる。

昭和六年（一九三一年）九月十八日支那正規兵による柳條溝の不法の爆破を契機として勃發した滿洲事變、昭和十二年（一九三七年）七月七日の蘆溝橋畔の銃聲を發端とする支那事變、いづれも、名は「事變」で「戰爭」といはれなかつたが、實體は、大陸の曠野を戰場とせる戰爭にほかならなかつた。しかも、滿洲事變とともに、新しき滿洲の秩序の建設が行はれ、支那事變とともに、新しき支那の秩序の建設が營まれ、かつ現に營まれつゝあることは、われわれの、いまのあたりみるとほりである。

だから、外面的にみれば、皇國日本は、昭和六年（一九三一年）このかた、戰爭と建設の營みにひたむきな努力を重ねてきてゐるともいへる。

そして、われわれは、名にとらわれて、大東亞戰爭の勃發で、はじめて大東亞建設が營まれつゝあるのだ、と早合點してはならないのである。

いや〳〵、われわれの父祖が、明治の御一新をなしとげて、いよ〳〵東亞の安定勢力たるべき自覺をあきらかにしはじめた頃の日清日露の二つの戰爭にまでさかのぼつて、想ひを致すべきである。すくなくも、皇國の大東亞建設の大業がすでに、明治大帝の御宇におけるこの二つの戰爭このかた、わが皇國の、眞劍に考へかつ實踐し來つたところであることを考へねばならない。

× × × × ×

さて、戰爭とは何か？

と開きなほられて、すぐ答への出來る人は、少いのではなからうか。

實にわかりきつたことだが、さて、「戰爭」とはなにか、ハッキリといふ段になるとかならずしも簡單ではない。

國際法學者ならば、戰爭とは、兵力による國家間の爭鬪なり、とか、國際法の禁ぜざる範圍においてあらゆる力を用ひ得る國家間の關係なり、とか定義するところであらうが、われわれは、こゝで、戰爭の國際法などを考へるつもりはない。

世界的な戰爭の理論家としては、世人は、おほむね、ドイツのクラブゼウイツとルーデンドルフ二人の名前をあげる。この二人は世界でも著名な戰爭論理家であるから、どんな戰爭論にでも、一應は、かならず引合ひにだされるのである。そして、この二人の戰爭論は、一應對立的に考へられるのであるが、世界の現實の動きは、クラウゼヴイツからルーデンドルフへと進みつゝあるので、對立といふよりは、むしろ、發展とみるべきところであらう。

× × × × ×

「總力戰」といふ言葉は、いまでは、國民學校の兒童でも、心得てゐる。日本で、いつのころから、誰が最初にこの言葉を使ひだしたかしらないが、新しい戰爭觀にふさわしい用語であるやうに思ふ。

ドイツのルーデンドルフといふ將軍が、第一次世界大戰の實地體驗にもとづいて、全體戰爭（トターレル・クリーク）といふことをいひだしたことは、誰でも知つてゐることである。

將軍の有名な「全體戰爭論」といふ本は、ドイツが「武力戰では勝つたが、全體戰に敗北した」ことを、いろ〳〵の事實を例證して、書いたものである。將軍

の「大戰回顧錄」といふ本にも、この戰爭論が熱心に展開されてゐる。

ルーデンドルフ將軍は、第一次世界大戰の實地體驗上、今後の戰爭は、ひとり軍事戰、武力戰、兵器戰だけで終るものではない、その外、經濟戰と思想戰、といふものがある。經濟と思想といふことになれば、軍隊の兵站と、軍隊の精神といふことが問題にもなるが、同時に、銃後國民の食糧と戰爭意力といふことが、絶對の問題となる。第一線の武力戰に勝つても、銃後の經濟戰と思想戰に敗れたら、結局、最後は敗北の外ない。經濟と思想といふ二大支柱に加ふるに、國家のあらゆる分野の力が、武力戰の完遂に集中されねばいかぬ、こゝに「全體戰」のもつ眞の意味があるのであると、ルーデンドルフ將軍は、聲を大にして、說いてゐるのである。

つまり、第一次世界大戰を、ドイツは、全驗戰として把捉せず、武力戰のみに

力を注いで、他の經濟戰や思想戰といふことをおろそかにしたから敗れたのだ、しかるに、聯合國側としてイギリスは、武力戰に旗色のわるいのをカバーすべく、思想戰とくに宣傳戰と、經濟戰とくに食糧戰に力をいれたから、武力戰につよいドイツを負かし得たのだ、といふのがルーデンドルフ將軍の議論である。

戰爭が武力と武力との間で行はれる武力戰だけであるかぎりは、戰爭の終始は、武力戰の終始できまる。武力戰が終ればそれで戰爭は終りである。そも〳〵武力戰が始まつたときに戰爭がはじまつたのだからである。

戰爭が武力戰だけで終始する間は、戰爭の期間といふものは、さう長からうはづはない。なぜなら武力戰鬪のエネルギーには限度があり、主力敗退によつて大勢が決せられてしまひ、休戰、講和、そして平和といふ順序に、すぐになつてしまふからである。

戰爭が武力戰だけだつたら、われわれには長期戰といふことは、おほむねないはづである。敵味方双方が、ある特定の戰場に出陣して、バラ〳〵撃ち合ひ、突き合つて、勝敗が決するかぎり、さう長期にわたつて、兩國が睨み合ふ必要がないからである。すぐ、休戰から講和條約となつて、ケリがつくはづである。

世界の戰爭史をみると、前の第一次大戰以前の戰爭方式は、大體に於てさうであつた。

西洋の普佛戰爭とか、東洋の日清、日露兩戰爭など、すべてさうである。

ところが、前歐洲大戰の事例は、われわれにむかつて、戰爭といふものが、もはや武力戰の勝敗だけで、勝敗を決し得られぬものだといふことを教へた。あれだけ武力戰で優勢を持つてゐたドイツが、結局、敗戰國となつた、といふ事實が、雄辨にこれを物語つたからである。ドイツの武力戰を指導した將軍がさういふの

だから、間違ひないことである。

前大戰でドイツが敗れたのは、英佛軍の武力で、ドイツ軍が大敗を喫し、英佛軍の前に全面的降服をした、といふわけでない。

有能な將兵が、戰場で、決死の奮戰をして戰果をあげてゐる留守の間に、銃後の國民の方が、軍隊より先に白旗をかゝげ、戰場の軍隊に白旗揭揚方を勸奬したのである。

銃後の國民は、戰爭を遂行しつゝある政府を、暴動を起して、轉覆せしめ、「自國の運命のためと稱して」一刻もはやい戰爭終結を望んだのである。

なぜか。

この事實は、あきらかに、戰爭の勝敗は、かならずしも、武力戰の勝敗のみによつてきまらぬ、といふ新例を世界戰爭史の上に示したのである。

武力戰の勝敗によつて、勝敗のきまらぬ戰爭に、勝敗をきめさしたのは、何であらうか。

說明するまでもないことである。

銃後國民が、敵の思想宣傳のため戰意を喪失したといふことである。銃後國民が、國民生活上の困苦に耐へかねて、戰意を喪失したといふことである。時の政府がかうした敵の思想宣傳戰術に應戰の準備なく、國民生活の安定といふ政策の考慮がなかつたいふことである。時の國民に、戰爭意力といふものの錬成が足りなかつたといふことである。

つまり前大戰のドイツは、第一線の武力戰で勝つたが、銃後の思想戰、宣傳戰、經濟戰、生活戰で負けたために、全體の勝利に見放されたといふことになる。

この一大事例を、一番よく、身をもつて體驗したドイツのルーデンドルフ將軍

は、この第一次大戰において、世界は、はじめて、國家總力戰といふものを知つたにもかゝはらず、ドイツはいちはやく、大戰の總力戰的性格を察知できず、これに對處しなかつたために、敗れたのだ、と喝破したのである。

まことに、戰爭であるかぎり、武力で敵を壓倒せねばならぬことは、どつちみち大鐵則に變りはないけれども、軍隊の背後に、これを支援する國民が、敵の宣傳に負けて戰意を喪失した揚句、國論分裂、革命を起したりするやうでは、軍隊が軍事的に勝つて見たところでどうにもならぬ。それこそ、海戰で大勝利を得ながら、敵のために、港灣の全部を占領されてしまつて、寄るべなき海に漂ふ艦隊のやうなことになるからである。

それから又、第一線の軍隊のために、兵糧彈藥が山と積んであつても、肝腎の國民——の多くは、兵隊の親子兄弟である——が餓ゑて居るやうでもいかぬが、

さればといつて、銃後の國民が、ビジネス・アズ・ユージャルどころか、贅澤三昧で、生産に努めなかつたら、尨大な軍隊消費のための補給がつゞかぬ。

話が、こゝまでくると、戰爭が武力戰だけで勝敗つかぬ大きい原因の一つは、兵器の進化といふことであらう。航空兵器の發達と潜水艦の發達が、代表的なものである。航空兵器は空襲空爆によつて、敵國本土を戰場化し、銃後國民の有形無形の生活力を脅やかし、生産工場の補給妨碍を遂行する。潜水艦は、海上封鎖によつて、敵國の海上通商を破壞し、食糧や工業原料の國内移入を妨碍する、といつたわけで、戰場は、單に第一線だけでなしに、銃後の本土でさへ戰場化する。軍隊だけが戰士でなしに、銃後の國民全體が戰士でなければならなくなる。

前大戰で、航空機や潜水艦が脅威をふるひはじめたのは、おほむねその後期においてであるけれども、大戰全體としてみれば、とにかく、かうした戰爭形態が、はつきりみられたのである。

ルーデンドルフ將軍は、かうした戰爭形態こそは、今後、世界に起ることあるべきあらゆる戰爭の不可避の形態だといふことをいちはやく喝破し、聲を大にして提唱したのである。

ルーデンドルフ將軍の全體戰理論が現はれるまでの戰爭理論の通說は、これもドイツの有名な戰略家クラウゼヴィッ將軍の戰爭理論であるが、世界大戰以後、總力戰理論が行はれて以來といふものクラウゼヴィッ將軍の理論は、通らなくなつた、といふのは、普佛戰爭やナポレオン戰爭しかしらぬ將軍の理論が、いはゆる時代遲れの理論となつたからである。どういふ主張が時代遲れとなつたのかは、詳論するとキリがないが、要するに、クラウゼヴィッ將軍の戰爭理論がもつとも端的に表現された「戰爭は、他の手段をもつてする政治の延長である」といふ言

葉に問題のすべてが存するのである。さらにまた「戰爭は決鬪の進化したもので、敵を屈從せしめてわが意思を貫徹せんがための暴力行爲である」といふやうな主張の要點にも問題があるのである。

だが、しかし、あらためて說明するまでもなく、現實の世界の進展は、戰爭をもつて、單なる政治の延長とみることを許さなくなつた。主として軍隊を通じて實施される武力行爲のみが戰爭の手段とみられなくなつた。戰爭そのものは、國家および民族の存立を賭けた國家および民族の間の自衞鬪爭であり、單なる政治の延長でなしに、國家および民族の一切の生活が戰爭行爲の一部として構成されるにいたつてゐるのである。こゝに、クラウゼヴイッツ將軍の戰爭理論の非時代性があり、ルーデンドルフ將軍の總體戰理論の時代性があるわけである。

× × × × × × ×

「總力戰」といふものが、近代戰爭の一大性格であることは、かくして、いま、世界人の常識となつてゐるが、その總力戰の意味合ひについては、われわれの間にかならずしも、正しい認識あり、とのみいへないやうに思ふ。

「總力戰」といふと、人によつては、武力や思想戰や經濟戰や政治戰やを一切平等視し、思想も經濟も政治も、すべて、武力と同等もしくは同等以上の戰力あるものと誤解してゐる向きもないでない。

しかし、ゆめ忘れてはならぬ、總力戰は、讀んで字のごとく、國家の總力をあげての戰爭であるけれども、戰爭の本質たる武力戰が、その他の要素戰と平等の立場で考へられるわけにはいかない。思想戰も大切であるが、武力戰以上に考へ

るわけにいかぬ。經濟戰またしかり。食糧戰またしかり。

一切の國家要素を、あげて、武力戰遂行に奉仕せしめるのが、總力戰の變らざる本體でなければならない。武力以外の國家要素は、いづれも、武力戰遂行への奉仕といふ形で、それぞれの戰爭形態を形成する、といふことでなければならない。武力以外の政治・思想・經濟・交通その他一切の國家要素を總動員して武力戰の完遂を容易ならしめることが、總力戰第一の性格であることを、われわれは絶對に忘るべきでないのである。

われわれは、われわれの現に當面してをる世界秩序の轉換戰が、われわれのもつ一切を戰爭目的に合つたやうに轉換するのでなければ、完全に遂行できるものでないことを、よく反省せねばならぬやうに思ふ。いひかへれば、世界秩序の轉換戰は、あきらかに、總力戰の性格をもつて行はれてゐるのであるから、われわれ

のもつ一切を總力戰體制に整備せねば、この戰爭の勝利者となりえないといふことである。

總力戰とは、武力戰の完遂といふことを中心とし、政治・經濟・思想・文化・教育などのあらゆる分野の力その他一切の生活力を總動員して、そのもろ〳〵の力をして國防目的上、長期にわたつて最高度の能力を發揮せしめるのでなければ、勝利者たりえぬやうな形態をとつて行はれる戰爭をいふのであるから、いはゞ總力戰のなかには、武力戰・政治戰・經濟戰・文化戰・生活戰などの諸方式がふくまれてゐるわけである。そして、この總力戰に對處するための總力國防といふなかには、軍事國防・政治國防・思想國防・經濟國防・文化國防・生活國防などがふくまれるわけである。これらのもろ〳〵の部分は、けつして、同列に並ぶべきものでなく、武力戰と軍事國防とを中核とし、頂點として、他はこれに即應した

努力を要請されるのである。これは、前言のごとく、きはめて重要なことである。武力戰の勝利を忘れた總力戰や、軍事國防の完璧を忘れた國防國家といふことは、ナンセンスにすぎないのである。

× × × × × × ×

かういふ總力戰の意義・性格・内容にかんがみて、總力戰完遂を容易ならしめる最上の國家形態を世界で最初に考へだしたのが、誰も知つてる通り、ナチス、ドイツである。ナチスは、ルーデンドルフ將軍の國家總力戰の研究が示すやうに、前大戰のことは、一から十まで、研究に研究をかさねた。單に、政府確立後のみでなく、在野の時代から、總力戰完遂の理想體制について研究を怠らなかつた。ルーデンドルフ將軍は、名だたるナチス黨員で、ヒトラーとともに、暴動一撥

にまで參加した經歷さへある人である。

ローマは一日にして成らぬ、ナチス・ドイツ建設も、ナチス黨多年にわたる研究の成果なのであつて、ナチス政府確立と同時に、これを果敢に斷行したまでのことである。

しかも、政府確立後でさへ、果斷、斷行もさることながら、愼重なる調査研究にも、徹底を欠なかつたのである。

ナチスは、新ドイツの建設にあたつて、總力戰完遂のために、最も合目的々な體制を考へた。かいつまんでいへば、人・思想・教育・土地・原料・運輸など、一切の國家要素を、國防の一點に集中し、國防力の增强といふことを主眼として、萬事を規定したのである。國家の總力を國防目的のために最高度に發揮しうるやうな國家體制をナチスは「國防國家體制」と稱し、この體制の整備にむかつて、遮

二無二突進したのである。

今次第二次大戰當初、ドイツの壓倒的優勢を前にして、世界の人は、ドイツはなぜかうも強いのか、と考へた結果、いろ〳〵理由もあらうが、この國防國家體制の整備をいちはやく完成してゐたことがその最大理由だ、といふことに意見の一致をみたやうである。

それほど、ナチス・ドイツ八ヶ年の政治は、國家のあらある要素を「國防」の一點に集中し、それ全體として、總力の最高度の發揮ができるやうな體制を確立整備することに、懸命の努力をなし、かつ、それにほゞ成功、完璧に近い成果をあげたのである。

しかも、單に體制の確立・整備だけにとゞまらず、その確立・整備によつて得た實力を適當な對外政治力で押すことによつて、着々國威の發揚をやつてのけた

のである。國際聯盟脱退（一九三三年一〇月一四日）、ザール歸屬（一九三五年一月一三日）、ラインランド進駐（一九三六年三月七日）、アンシルス（一九三八年三月一三日）、ズデーテン地方合併（一九三八年九月二九日）、チエッコの無血合併、スロバキヤの保護領化（一九三九年三月一四日）、メーメル回復（一九三九年三月二一日）など、かぞへあげてみただけでも相當なものである。

× × × × × × ×

「國防國家」とか「高度國防國家」といふ言葉も、「總力戰」といふ言葉と同樣、いまや世界人の常識用語となつてゐる。

國家總力戰といふことが將來戰、いな現に行はれつゝある近代戰爭の一大性格であるかぎり、これに戰ひぬくためには、それだけの國家體制ができてなければ

ならぬ。國家の總力をあげて國防目的に集中し、國家總力の最高度發揮を可能ならしめるやうになつてゐる國家といふのが、國防國家のもつ一應の意義內容である。いはば總力國防を整備・確立せる國家のことである。

しかし、これだけでは、一應の表面的說明にすぎないのであつて、實は、國防國家といふ觀念には、新しい戰爭觀のほかその基調をなす新しい國家觀、新しい世界觀といふものゝ生成が重要な役割をもつてゐるのである。一言でいへば、新しい世界觀、新しい國家觀は、古い自由主義的・個人主義的なものゝ代りに、新しい統制主義的・全體主義的なものをみとめるのである。

要するに、われわれは、かうした新しい世界觀、新しい國家觀、新しい戰爭觀にめざめない國家に、新しい國防國家體制は起り得ないのみならず、かうした國防國家體制の確立こそが國家總力戰爭のための建設の目標であり、理念でもあることを十分に味はねばならないのである。

世界觀の戰爭と建設

×

ドイツを主體とする歐洲戰爭と日本を主體とする大東亞戰爭とは、いまわれわれの目の前で、完全に一つの世界戰爭として營まれるにいたつて居る。

歐洲のドイツも東亞の日本も、その戰場と戰略こそ異つてゐるものゝ、「戰爭目的」は、二つながらひとしく、米英その他の民主々義國家群を打倒し、民主々義英米主義を主軸として發展してきた近世の世界秩序、とくに前大戰後における世界のアングロサクソン化を打破するところに置いてゐるのである。

ドイツは、前大戰の結果、英米佛の策動によつて、完膚なきまでの屈辱講和の條約の下に喘ぐことになつて、いづれの日にか再起、復仇せんものと機會を狙つてゐたのであり、日本は、つとに久しく、東洋の永遠なる平和を確立すべく、國力增强の段階毎に、直接間接、妨碍をなす西歐諸勢力の東亞よりの驅逐に努めてきたのである。そして、兩者ひとしく、自國を中核とした新秩序の形成、そして、さらにその新秩序を主軸とした世界新體制の建設といふことを指導理念として考へてゐるのである。

しかも、この東西二つの新秩序建設國が、つとに、固く盟約を結ぶことによつて、その共同目的を達すべきことを誓つて居ることは、われ〳〵のつねに胸に置くべき事柄である。

まづ、昭和五年（一九四〇年）九月二七日、ベルリンにおいて正式調印締結さ

れた日獨伊三國同盟の條約要旨をみやう。

大日本帝國政府、ドイツ國政府およびイタリヤ國政府は、萬邦をして各々その所を得しむるをもつて恒久平和の先決要件なりとみとめたるにより、大東亞および歐洲の地域において、各々その地域における當該民族の共存共榮の實をあぐるに足るべき新秩序を建設し、かつこれを維持せんことを根本義となし、右地域において、この趣旨によれる努力につき相互に提携しかつ協力することに決意せり。

而して三國政府は、さらに、世界いたる所において、同樣の努力をなさんとする諸國に對し、協力を吝まざるものにして、かくして世界平和に對する三國終局の抱負を實現せんことを欲す。よつて日本國政府、ドイツ國政府およびイタリヤ國政府は、左の通り協定せり。

第一條

日本國は、ドイツ國およびイタリヤ國の歐洲における新秩序建設に關し指導的地位をみとめかつこれを尊重す

第二條

ドイツ國およびイタリヤ國は、日本國の大東亞における新秩序建設に關し、指導的地位をみとめかつこれを尊重す

第三條

日本國、ドイツ國およびイタリヤ國は、前記の方針に基く努力につき相互に協力すべきことを約す。さらに三締約國中いづれかの一國が、すでに歐洲戰爭又は日支紛爭に參加し居らざる一國によつて攻擊せられたるときは、三國は、あらゆる政治的、經濟的および軍事的方法により相互に援助すべきことを約す

この條約締結にあたり、畏くも、大詔を煥發遊ばされたのであるが、あきらかに、かう仰せられてゐる。

大義を八紘に宣揚し、坤輿を一宇たらしむるは實に皇祖皇宗の大訓にして朕が夙夜眷々措かざる所なり而して今や政局は其の騒亂底止する所を知らず人類の蒙るべき禍患亦將に測るべからざるものあらんとす朕は禍亂の戡定平和の克復の一日も速ならんことに軫念極めて切なり乃ち政府に命じて帝國と其の意圖を同じくする獨伊兩國との提携協力を議せしめ玆に三國間に於ける條約の成立を見たるは朕の深く懌ぶ所なり

惟ふに萬邦をして各々其の所を得しめ兆民をして悉く其の堵に安んぜしむるは、曩古の大業にして前途甚だ遼遠なり爾臣民益々國體の觀念を明徴にし深く謀り遠く慮り協心戮力非常の時局を克服し以て天壤無窮の皇運を扶翼せよ

日獨伊三國は、昭和一六年（一九四一年）一二月一日、日本の對米英宣戰に即應して、さらに、緊密なる協定、すなはち對米英戰共同遂行・單獨不講和・新秩序建設協力の三大原則を內容とする新協定を結んだのである。

第一條

日本國、ドイツ國およびイタリヤ國は、アメリカ合衆國およびイギリス國により強制せられたる戰爭をその執りうる一切の强力手段をもつて勝利に終るまで遂行すべし

第二條

日本國、ドイツ國およびイタリヤ國は、相互の完全なる了解によるにあらざれば、アメリカ合衆國およびイギリス國のいづれとも休戰または講和をなさゞるべきことを約す

第三條

日本國、ドイツ國およびイタリヤ國は、戰爭を勝利をもつて終結したる後においても亦一九四〇年九月二七日その締結したる三國條約の意義における公正なる新秩序招來のため最も密接に協力すべし

かやうに、日本とドイツとは、それ〴〵東と西とに分れて世界新秩序建設のため、さしあたつては世界戰爭完勝のために、緊密な提携協力をもつて努力しつつあることは、單に、政治的・軍事的意義のものたるにとゞまらないのであつて、われわれは、その深い世界史的意義の上から、精神的・思想的・世界觀的轉換のもつ意味をよく味はねばならぬと思ふ。

× ×

世界に新舊二つの世界觀が行はれて、對立抗爭し、あげくの果てが、世界觀的な世界戰爭まで、惹きおこすやうになつた、そのそも〳〵の動因をなしたのは、これまた、前大戰以後の世界情勢そのものであつた。

第一次歐洲大戰は、その規模こそ、世界史はじめての世界的規模をとつた大戰爭であつたかもしれないが、いはゆる世界觀といふものゝ上からながめれば、內面的には、さう大した深刻さをもつた戰爭ではなかつた。もと〳〵、產業革命による近代國家へのいちはやい脫皮を武器にして、世界侵略の爪牙をふりまはしつゝあつた同じ立場の西歐諸國の勢力爭ひが、その大きな原因だつたのであるから、戰爭自體は、單なる西歐諸國同志の關ヶ原の一戰ぐらゐの意味しかなく、勝

つた英米佛側が德川幕府となり、敗れたドイツその他が石田三成となつただけの話である。

だが、その戰爭後の世界の動きが、戰爭そのものよりも、深刻な情勢を示すことになつたのである。いままでみられなかつた世界觀の對立が、世界に芽を出しはじめたからである。

大戰に勝つて國際聯盟と稱する「幕府」をスイスのジュネーブに開設したアングロ・サクソンは、氣おごつてその善後經營を誤り、かへつて、世界の世界觀的動搖を激化した傾きさへあつたのである。

しかし、また端的にいへば、ながらく世界に君臨した英米佛のもつ世界觀——自由主義・個人主義・機械主義の世界觀——の壽命が、そろ〳〵盡きはじめて、大戰の勝利を置き土產に殁落しかけたのだ、とみる方があたつてゐたのである。

古いのれんに物をいはして、多くの味方を引きつけて、喧嘩に勝つてはみたものゝ、すでに、多くの德性を失ひかけ、精力衰へかけてゐた古いのれんの主は、喧嘩終結後の善後措置を完全にやつてのけるだけの腕と力をなくしてゐたのである。

そこで、アングロ・サクソンの世界觀であるが、一言で申せば、やはり、自由主義・個人主義的世界觀といふことになるであらう。

英米佛の建國精神が、自由主義・個人主義世界觀を基調としたものであつたから、彼等の支配せる世界も、また、滔々として、自由主義・個人主義世界觀が、ゆきわたつたことは、あたりまへのことであつて、しかも、きはめてながい間、世界を支配し、大戰に勝利さへ獲得したので、英米佛の自由主義・個人主義世界觀は、もはや、世界人類社會の考へおよぶ絕對の原理であり、到達し得るかぎりの最高の攝理であるやうに思惟もされ、教育もされた。國際生活においても、國

家生活においても、社會生活においても、個人生活においても、ことごとく、自由主義・個人主義世界觀が、哲學者のいはゆるア・プリオリな、普遍絶對の生活原理であるやうに考へられた。この原理、この世界觀に反する一切の世界觀、一切の原理は、誤謬であり、犯罪であり、冒瀆であり、反文化的であり、野蠻であると、考へられた。

いままでの長い年月の間、英米佛の思想戰は、完全な勝利に終つてゐたのである。彼等の建設精神たる自由主義・個人主義世界觀が、世界を支配し風靡したことは、いひかへれば、思想の面から、彼等の世界支配が完遂されてゐたことを意味するからである。

むろん、英米佛の近代先進諸國が、世界における一切の文化をば、その自由主義・個人主義世界觀の徹底によつて、つよく推進し、たかく昂揚したことについ

ては、世界史の上で、一應大きな價値があたへられねばならぬ。この世界觀が、いちはやく、世界に徹底し、普及しなかつたならば、中世から近世への動きにおいて、世界は、封建主義からの脱皮を完全に遂行しえなかつたであらうからである。まことに、「近代は、自由主義とともに生れ、それとともに榮えた。科學はこれによつて發達し、技術は飛躍的な進歩を遂げ、物質の山は積まれ、世界は擴大され、人間の視野は全地平線へとひろげられ、燦然たる高度の文明が、この地上に築きあげられた。」自由主義の歴史的功績の絶大なことは十分にみとめねばならぬ。

個人主義もさうである。個人主義もまた一つの役割をもつた。これも一つの覺醒である。カント的人格自律の觀念は、人間を奴隷から解放し、またこれによつて人間の尊嚴さを繰り返し敎へてゐる。……都市の商人たちが、つくりだした社

會はその基礎において利己的な社會・物質的社會である。フランスの革命も個人の財産の基礎のうへに建てられた。アメリカの實狀は、個人の財産、財産を獲得する能力、その能力の相違、その相違から來る財産の諸階級を擁護するために組み立てられたのである。

かうした自由主義・個人主義世界觀に、それに相應した國家觀がうまれたことは、當然のことである。

英米流の自由主義・個人主義の世界觀によれば、國家とか民族とかは、個人の利益を保護し、個人の幸福を增進するための手段としての集合體でしかない。このやうな國家や民族は、必然の勢ひとして、他の國家や民族と利害關係上の對立を惹きおこすことになる。つまり、ある國家・民族の存立と、他の國家・民族の存立とは、たがひに、相容れないものであつて、自らの存立・發展をはかるため

には、他の國家や民族を征服しなければならないのである。といふことは、いひかへれば、世界は、西洋人の國家と民族のために存在する世界として、支配されねばならぬ、といふことである。

しかして、かういふ世界觀に基く多數の國家同志の間で、互ひの世界支配を完成しようとして、勢力爭ひが行はれるやうになるのは、あたりまへの話である。前大戰がすなはちその勢力爭ひであつて、それは、いはば、かうした世界觀の發展の生んだ必然的な、大きなカタストロフであると同時に、そのカタストロフの打擊の大きかつたために、硝煙の間から、徐々に、かうした世界觀に對する懷疑・反發・訂正・否定といつた標徵をもつたもろ〳〵の現象があらはれはじめたことでも明かなやうに、それは、自由主義・個人主義世界觀に終止符をうち、新らしい世界觀による攻勢の契機をつくつたものとなつたのである。

古い自由主義・個人主義世界觀に對して、世界で、一番早く、懷疑し反撥した國は、ほかならぬ大戰における戰敗國ドイツと戰勝國イタリヤであつた。

戰敗國ドイツの政府と國民が、戰後の尨大なる負擔に四苦八苦してる間に、國民の一部から、徐々に古い世界觀の打破こそ唯一の國難打解策だ、といふ聲が叫ばれ、政治的に動き出し、思想的に國民をとらへ出した。そのうちの一つの動きこそ、ヒトラー一派のナチス國粹運動であつたのである。

戰勝國イタリヤも、その政府と國民が、戰爭によつて得た獲物が、戰爭によつてあたへられた犧牲にくらべてあまりにも貧弱な現實に苛(さいな)まれて、これまた四苦八苦してる間に、國民の一部から、舊い世界觀の克服によつて窮境を突破し、國力を再建設しやう、といふ強い動きが、國家の政治と化し、國民の思想と化した。ムッソリーニ一派のファッショ國粹運動が、それであつたのである。

戰勝國日本は、その要求の全部が通つたわけではなかつたが、とも角、戰場から遠く離れれ極東において、各國の經濟機能の停止してゐる隙に、非常な經濟國力の伸張ぶりをしめしたゝめに、政府も國民も、大に氣をよくし、英米佛世界觀と世界支配を擁護するための國際機關たるにすぎない國際聯盟の重要な一員として、戰後の世界經營に參劃した。英米佛は、英米佛で、日本の東亞における勢力が、みづからの世界支配に對する大きな妨害であることをいつも念頭に置いで、着々世界經營をしてゐたのだが、殘念ながら、當時の日本の爲政者は、かうした動向には、大した懸念もみせなかつた。だから、大戰後の日本は、國際協調、英米追隨が對外政策の要諦となり、英米佛のデモクラシーが對內政策の基調となつてしまつたのである。日英同盟を破毀されても、ワシントン、ロンドンの軍縮條約を押しつけられても、迷へる日本の朝野は、おほむね、これを歡迎した

り、己むを得ぬと考へて平然としてゐたり、議會中心の政黨政治を憲法政治の常道と考へ、天皇機關說を日本憲法解釋のための最も「科學的」な、合理的な、權威ある最高學說と考へたり、その他、文化・教育・社會・經濟のあらゆる分野の世界觀的基調を自由主義・個人主義に置いたりで、甚だしいことには、大正末期昭和初期にかけて、猛烈な勢で、共產主義唯物主義的世界觀の侵入さへあり、政治・思想・教育・文化あらゆる分野における多數の有能有爲の人物が自由主義・個人主義世界觀を溫床とし、これにあきたらずして、左翼思想に走り、唯物主義的世界觀のとりことさへなつてしまつたのである。いひかへれば、前大戰後の日本は、完全に、英米佛の平和戰略、思想作戰にひつかゝり、對外的にも、對內的にも、危うく、無力無爲の惰弱國家になりかけてゐた。——それをたまりかねて起ち上つたのが滿洲建設の大仕事であつたのである。昭和六年（一九三一年）九月の滿

洲事變勃發は、いはば、英米佛の自由主義・個人主義世界觀による世界支配、その國內への侵入に對して、一大鐵鎚を下し、猛烈に反發し、かうした世界觀による混沌にいたらぬ前に、日本固有の新しき世界觀による興國を志したものにほかならない。

昭和六年といふと西洋歷で、一九三一年、ヒットラーが政權をとつて、本格的な國家經營として、古い自由主義・個人主義の世界觀の打破に着手したのが一九三三年であり、ムッソリーニが、ローマへ進軍し、强力內閣を組織して、組合國家建設に乘出し、古い世界觀の打破を絕叫したのが、一九二二年（大正一一年）であつた。イタリヤの動きは、一九三五年（昭和一〇年）の伊エ紛爭、エチオピア併合にいたつて、はじめて、その對外政策における世界觀的基調を明かにしたやうなものであるから、ふりかへつてみれば、日本の滿洲事變による動きこそは、

世界における舊秩序打破への原動力だつたわけであり、しかも、その後の日本の一擧手一投足、ことゞ〳〵く、その感があるのである。

× × ×

だが、さらにふりかへりみれば、滿洲事變が英米佛の古い世界觀による世界秩序に對する大きな打擊をあたへ、これを克服することによつて、新しい世界觀による世界秩序を建設すべき日本の大きな營みの口火をきつたものであることは間違ひなしとして、今次の大東亞戰爭——本格的な英米世界秩序打破のための戰爭——開始にいたるまでに、日本の國內體制は、はたして、十分な世界觀的脫皮、積極的再建設を遂げてゐたであらうか。新しい世界秩序の建設に乘出さんとするものが、否々、すでに、敢然と乘出したものが、自己の國內秩序の建設をすでに果したか、果たしつゝあるのか、われ〳〵は、大いに反省してみなければならぬ。

なるほど、ドイツの再建設着手は、日本の滿洲事變突發より二年おくれた。しかし、一たび、再建設に着手したドイツは、一九三三年以來、わづか七ヶ年位で、世界新秩序建設のための準備體制を完全に近くなしとげてゐた。しかも、國內における一切の古い世界觀に基く秩序を打破して、新しいナチス世界觀に基く秩序に切換へ、これを基調として、さらに、新しい戰爭觀と新しい國家觀の下に、新しい世界秩序建設實行のための國防國家體制を建設してゐた。古い世界觀の打破、古い世界秩序の變更によつて、世界に理想の平和をうちたてるためには、差當り、大規模な世界戰爭の到來は必然である。しかも、世界史上稀にみる大規模な世界觀的轉換のための大規模な戰爭は、あらゆる分野を總動員してかゝらぬば、勝ち

抜くわけには行かぬ總力戰爭なのだ。總力戰爭に勝ち抜くための準備は、總力國防でなければならぬ、國防國家の體制こそはこの大掛りな世界觀的戰爭に對處する絶對不敗の國家體制なのだ、といふのが、一九三三年（昭和八年）以後のナチス・ドイツのかたい信條であり、施政施策の根本基調であつたのである。

問題は、こゝである。

われわれナチス・ドイツにもとめる他山の石は、この點にもあるとおもふ。

だが、われわれが、こゝでよく〳〵頭においておかねばならぬことがある。古い英米流の自由主義・個人主義世界觀を打破して、これに代る新しい世界觀として、ドイツはナチス的全體主義世界觀を高らかにかゝげたのであるが、日本にも、日本獨自の皇國世界觀があり、從來、やゝもすれば自由主義・個人主義世界觀の壓力のために、うちかくされてゐた立派な世界觀があり、この世界觀を明徴し、徹底し、施政施策の基調とさへすれば、古い自由主義・個人主義世界觀は、立派に打破できるといふことである。しかし、ナチス的全體主義的世界觀のごときは日本的世界觀の實體のうちに醇乎として包容されて、しかも、それ以上の內容と力とをもつてゐるのである。

要は、この日本的世界觀によつて、滿洲事變以來の對外、對內政策の一切をリードしさへすれば、よかつたのであるが、現實は、かならずしも、さうは行かなかつただけの話である。しかし、いまや、滿洲事變以來の、否、明治維新以來の日本的興亞政策、日本的世界政策の總決算をなすべき大東亞戰爭が開始されてゐるのである。

過去は過去としで、われわれは、戰爭に勝ち抜くためには、それだけの準備建設を必要とする。ドイツは、戰爭に入るまへに、戰爭のための建設をした。日本

とても、滿洲事變乃至支那事變このかた大東亞戰爭に入るまへに、立派な「戰爭のための建設」をしてきたのである。滿洲事變や支那事變も、名こそ事變だが、やはり「戰爭」に違ひない、日本は、まさしく、戰爭しつゝ建設してきた上に、さらに、より大いなる建設のために、戰爭をなしつゝあるのである、何といふ雄渾な歩みであらう。繰りかへしていふ。

戰爭しつゝ、建設しつゝ!!

建設しつゝ、戰爭しつゝ!!

われわれは、刻一刻、新しい世界秩序へと脱皮してゆくのである。世界觀の戰爭と世界觀の建設によつて、われわれは、あくまで、勝利への進軍をつゞけねばならないのである。

日本的世界觀とナチスの世界觀

×

大東亞戰爭と大東亞建設の根本理念は一言でいへば、八紘一宇（または八紘爲宇）といふことに盡きることは、いまや、皇國民一億のかたい信念となつてゐる。

およそ、大東亞の戰爭と建設とについて語らんとするもの、考へんとするものは、ひとしく、この八紘一宇の肇國精神を片ときといへども、肝に銘じ、腦裡に刻みつけておかねばならぬ。これなくしては、皇國のまさしくとりかゝつてゐる

大東亞建設の大業が、米英の大東亞侵略や、ひいては、ドイツの歐洲新秩序建設の根本理念やと、いかに異るものであり、どれほど尊いものであるかをみのがしてしまふことになる。

「八紘爲宇」、すなはち、八紘を掩ひて宇と爲す、とは、申すまでもなく、神武天皇が、大和の橿原に天下の中心となるべき都をお奠めになつたときの詔の中に、仰せられてある御言葉である。

「日本書記」の「神武天皇紀」における御奠都の詔には、かう仰せられてゐるのである。

我東に征きしより玆に六年になりぬ。皇天の威を賴りて凶徒就戮されぬ。邊土未だ淸まらず餘奸尙梗しと雖も、中洲之地復風塵なし。誠に宜しく皇都を恢廓め大壯を規擧るべし。而るに、今運屯蒙に屬ひ、民の心朴素なり。

巢に棲み、穴に住む習俗惟れ常となれり、夫れ大人の制を立つる、理必ず時に隨ふ。苟も民に利有らば、何ぞ聖造に妨はむ。且當に山林を披拂ひ、宮室を經營りて、恭みて寶位に臨み、以て天々を鎭むべし。上は則ち朝靈の國を授けたまふ德に答へ、下は則ち皇孫の正を養ひたまひし心を弘めむ。然して後に、六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて宇と爲むこと、亦可からずや。夫の畝傍山の東南橿原の地を觀れば、蓋し國の奥區、治るべし。

まことに、詔のうちに拜する皇謨の廣大なる、億兆一たび拜承して、おのづから、心あらたまり、身ふるひたつ思ひがするのである。

こゝに、肇國の基は、磐石のごとくに、さだまり、爾來連綿たる皇統、御歷代養正に大御心を弘められてゐる。

明治天皇の御製に、

橿原のとほつみおやの宮柱たてそめしより國はうごかず

と仰せられてあるやうに、皇祖天照大神の大御心に基かせられた　神武天皇のこの肇國の御精神は、ながく〳〵御歴代の天皇によりうけつがれて、國の礎はうごかず、今日にいたつてゐるのである。

そして、この御精神がまた、すなはち、われわれ臣民の翼賛したてまつる大東亞建設の天業の御精神でなければならないのである。

八紘、すなはち「あめのした」は、多くの異るものゝ存在を意味し、爲宇、すなはち「いへとす」とは、その異立を統合するの意味である。異立は、榮えを意味し、統合は、すなはち、まつらふことである。大東亞の諸國家・諸民族をして、おの〳〵そのところを得しめ、その特性を發揮せしめつゝ、大東亞全體の發展隆

昌を圖る、――これが、大東亞建設における八紘爲宇の御精神の要點にほかならないのである。

あらゆる對立・相剋・摩擦・爭鬪を止揚して、むしろ萬物を包容するといふ八紘爲宇の大精神は、このやうに、わが皇國の世界に比類なき世界觀として、いまや、大東亞建設の大業に、くまなく、滲透されて行かねばならぬ。

あらゆる民族は、日本に敵するときにのみ日本の敵として、征討されるのであつて、一たび、われに順へるものは、すべて、日本國民たる大家族の一人に加へられるといふ廣大無邊の皇德、包容性豐かなる國性こそ、大東亞建設の前途をして、洋々大海のごとからしめるのである。

一億中一人といへども、そのところを得ざるものなき樣しろしめし給ふ大御心は、大東亞の圏内に於けるあらゆる國家、あらゆる民族をも、それ〴〵の地位と

特性において、そのところを得しめる様しろしめし、かくして、この大精神を人類世界におよぼさしめんとするのである。

それは、たゞ單にわが日本のみの生きかつ富むの道にあらずして、大東亞乃至世界全體のあらゆる國家あらゆる民族が生きかつ富むの道である。相倚り相扶けて自他ともに、眞に生きかつ富むの道を現實の世界に具現せんとするのである。端的にいへば「征服」とか「支配」とかいふことは、わが八紘爲宇の大精神に悖るものである。

このやうな日本世界觀、このやうな根本理念をわすれて、大東亞の建設はないはづであつて、そこに、ナチスといへども、絶對に、模倣しえざる日本の特性が存するのである。

×　×

「世界觀」といふ言葉は、ナチスにおいて、とくに愛用される言葉である。原語で、ヴェルトアンシヤウウンクといふ。ヴェルトといふのが「世界」といふ意味の語で、アンシヤウウンクといふのが、「觀察」とか「見解」とかいふ意味の語である。世界に對する觀察、世界に對する物の見方、さういつた意味の言葉である。これをむづかしくいふと、世界觀とは、世界との關聯における人類の生活の意義の全體と、人類がその生活をなして行く上において宇宙のあらゆるものに對してもつ所の價値の全體との、二つの全體を綜合して得られるところの總體的な考へ方の構成をいふのださうである。しかし、こんなむづかしい定義はどうでもよい。要は、それによつて所期される內容であり、それによつて意圖される目標で

ある。

ナチスが「世界觀」といふことを八釜しくいひだしたのは、新國家建設の精神的・思想的基調の上に、强力な根本的な統一を期したからである。

いひかへれば、一九三三年（昭和八年）からナチス政府の手によつて建設活動にはいることになつたドイツは、かうした根本的な精神的思想的基調から叩き直さねば、十分な建設工作をなし得なかつたといふことである。

ドイツ民族六千萬をナチス世界觀で、心底から叩き直し、錬〻直すことが、ナチスの戰爭のための建設にとつて、第一の要件だつたのである。

だから、ヒトラー政府は、その新ドイツ建設にあたつて、國民の精神的團結の强化のために、ナチス的世界觀の普及徹底、この世界觀を基調とした施策といふことに全力を集中した。單なる國民の道德的精神的緊張統一といふことではなくして、もつと突き進んで、ものゝ考へ方の根本的革新、英國流デモクラシー的考へ方に對する世界觀的革新といふことを要請したのである。

ナチス的世界觀――これが、新ドイツ國建設、ドイツ總力國戰家體制、高度國防國家の體制の確立における一切の精神的基調とされたのである。一九三三年一月のヒトラー政府成立以來、庶政一新の一切の理念的基調が、このナチス的世界觀であつた。

しからば、このナチス的世界觀とは、そも〳〵。どんな內容をもつた世界觀なのであるか。

ナチスといふのが、ナチオナルゾチアリスムス（民族社會主義）もしくは、ナチオナルゾチアリスチツシエ・ドイチエ・アルバイター・パルタイ（民族社會主義ドイツ勞働黨）の略稱であることは、とくに說明するまでもないことであるが、

その呼稱がしめすやうに、ナチス根本理念は、民族主義、いはゆる民族協同體の思想である。

民族協同體（フォルクス・ゲマインシャフト）といふ觀念は、ナチス思想において とくに重要視される核心であるが、ナチスによれば、民族協同體とは「血と土」を基調としてできたものである。したがつて、民族協同體は、血族協同體でもあり、土地協同體でもある。民族協同體にあつては、民族同體が、血と土とのつながりにおいて、職業的身分によつて、社會を構成する。そして、職業的身分によつて構成された民族協同體社會は、いはゆる指導者原理によつて運營される。「職業的身分」の觀念によつて、ナチスは、民族構成員を自由主義的營利勞働の擔當者に墮落せしめることなく、むしろ、かうした中世的宗教的理念を復活せしむることによつて、職業觀念を營利思想から勤勞思想へと切りかへた。

ナチスによれば、民族構成員は、職業によつて、勞働協同體を構成し、社會的地位身分を獲得するのであるから、そこでは、もはや、各個人の自由な民族的意思決定はゆるされないはづである。民族全體が、意思を共にし、行動を共にし、闘爭を共にし、困窮を共にし、要するに運命を共にするところの、意思協同體であり行動協同體であり、闘爭協同體であり、困窮協同體であり、要するに運命協同體であるのである。

そして、かうし協同體の意思・感情・行動・闘爭・困窮・運命といふものをよく熟知し、よく體得せるところの協同體人格の所有者が、この協同體の指導者となつて、指導者原理に則つて、民族全體の意思・感情・行動・闘爭・困窮・運命を指導するのである。かうした指導者は、もはや、單なる獨裁者といふ以上のものであつて、民族そのものと本質的一體をなす最高至上の絶對者である。

だから、ナチス世界觀による國家論においては、最高の政治價値を有するものは、民族である。國家そのものは、民族の單なる手段で、何らの價値を有するものではない。いひかへれば、國民は、民族意思の單なる執行者であり、國家は民族あつての國家である。民族は、國家より優位にある、といふのである。

このことは、ヒトラーの「わが闘爭」のなかに、ハッキリと書いてある。すこしばかり、讀んでみよう。——

ユダヤ人カール・マルクスは、民族國家の思想からブルジョア階級を追ひだすことによつて、國家そのものを否定する彼の怖るべき教義の道が開かれたといふことを知つた。かやうにして、一たび、國際主義者の奸計の犠牲となると、ブルジョア階級は、もはや彼らの民族を維持することができなくなる。そして、彼等が覺醒しないかぎり、彼らの世界は死の運命につながれる。

この理由によつて、民族的人生觀に基づいた新運動の第一の義務は國家が民族の保護者であるといふことが、明白に理解されねばならないといふことである。

國家は、文化を創造することができない——國家は、單に、文化を創造する民族に役立ち、これを保護し得るに過ぎない。

かくて、つねに昂揚されつゝある人類の成功はいかなる國家にも依存せずして、文化を創造し得る民族の生存、ならびに、その民族の開花的な生活に依存する。

國家は、一つの目標への手段である。

國家の唯一の目的は、肉體的にも精神的にも同等な人間の協同體を維持し、向上させることである。この目的に役立たない國家は畸形物である。……

國家は、一民族によつて生命のための永遠の戰ひに使用すべき偉大にして強力な武器である——それは、また、共同の意思を表現するが故に、あらゆる者がそ

れに服從せねばならぬ武器である。……

かういつたナチス世界觀、ナチス國家觀であるかぎり、それが皇國世界觀と根本的に異ることは、いふまでもないであらう。

× × ×

大東亞新秩序の建設は、ひとり、皇國日本のための建設にとどまらず、大東亞の諸地域、諸民族をして、それ〴〵そのところを得しめ、特性を發揮して、共存共榮の實をあげしめるための建設でもある。しかるに、ナチス・ドイツの新歐洲秩序の建設は、要するところ、ドイツ民族の血族及土地協同體を確保し、全歐洲をドイツ民族の能力の發揮、繁榮といふことのために、新たな觀點から、建て直さうといふのである。いはば日本は、八紘爲宇といふ大精神でもつて、「權威による建設」をなさう、といふのであるが、ドイツは、民族社會主義といふ根本理念でもつて、「權力による建設」をなさう、といふのである。權威は、德による心服を要請し、權力は、力による壓服を要請する。權威は大和による支配をもとめ、權力は、征服による支配をもとめる。

大東亞の建設と新歐洲の建設とは、その根本理念において、かうした差異がある。しかし、これは、もとより、日本とドイツの歷史。國柄から來る必然的の歸結であるのであつて、ヒトラーがドイツ國再建の大業を、完遂し、再建ドイツ國を中核體として、アングロ・サクソンの束縛を脱した新しい歐洲體制をうち立てようといふときにあたつて、その遠大なる計畫にふさはしい深遠な指導理念をもとめても、ドイツとしては、所詮、かうしたナチス精神以上にでることを得なかつたまでのことである。しかし、それにしても、ヒトラーの指導下に、ドイツ民族うつ

て一丸となり、忠勇にして果敢なる將兵が喜んで祖國の難に赴く現在の姿といふものは、ドイツとしては、一應理想の極致に達してゐるとみるべきであらう。

しかも、その努力は、着々效を奏して、一九三三年（昭和八年）のヒトラー政府成立このかた、實に、數へきれないほどの國力の伸張をみせ、ことに、一九三九年（昭和一四年）の對波戰勃發以來の三年間において、歐洲大陸の勢力は、おほむね、ドイツの力の前に、慴伏し、歐洲新秩序の地盤をおほむね確保して居るのであり、これは、丁度、滿洲事變、支那事變このかた滿洲國建設蒙彊建設新支那建設が着々姿を整へ、大東亞戰爭勃發によつて、はじめて、天地豁然（かつぜん）、南方諸地域を一擧に、わが手に收めて、こゝに、一應の大東亞建設の地盤を確保しえてゐるのと、歩調をおなじうする。しかも、この歩調は、一九三九年（昭和一四年）の三國防共協定、一九四一年（昭和一六年）の三國軍事同盟といふかたい結びによつて、ます〳〵拍車をかけられつゝあるのである。

基調たる根本理念もさることながら、現實の目標が、究極においておなじ姿をもとめつゝある以上、これまた當然の歸趨でなければならないことである。

× × × ×

たゞ、こゝで、ナチス・ドイツの企圖しつゝある歐洲新秩序について考へておかねばならぬことがある。

それは、ナチスのいはゆる民族社會主義、民族國家主義、一民族一國家主義による全體主義理念が、現在および將來の歐洲新秩序の建設にあたつて、いかやうに扱はれつゝあるか、扱はるべきか、といふ問題である。

すでに、東歐および北歐を席卷し、西部戰線も、バルカン戰線も、思ひのまゝ

に慴伏せしめ、遠く北阿戰線にまでも、その手をのばしつゝあるドイツは、いまや、その廣大な新歐洲圈內に、數多くの民族を包含してをる狀態であり、このもろ〳〵の國家、民族を、ドイツ民族のナチス國家との關係で、いかやうな取扱ひをなすかは、ドイツとしては、まことに重大な問題なのである。

しかも、ドイツには、歷史的にも、國柄としても、日本におけるやうな八紘一宇の根本理念がない。ヴエルサイユ體制の打破、大ドイツ國の再建までは、指導理念として、民族社會主義の强力なる實踐のほか、なにも考へる必要なく、それで十分な效果をさへあげてきたのであるが、第二次歐洲戰爭勃發以後の新情勢に對處せんとするドイツとしては、いまゝでの民族主義的全體主義の理念のなかに、歐洲新秩序建設への指導性がはたして、十分にありうるかどうか反省せねばならぬ立場にあるのである。

おそらく、歐洲戰爭も對ソ戰爭の結末、いまだつかず、いづれドイツを中心にして考へらるべき歐洲新秩序は、現段階としては差當り緊要な經濟建設に主眼が置かれてゐる程度で、その根本的な政治體制、その指導理念といふことになれば、ドイツとしては、まだ〳〵構想を練り、工夫を凝らさねばならぬ餘地が大にあるのではないか。

たゞ、こゝで、興味ふかく想起されるのは、ナチス・ドイツの新國家理念、新秩序理念が、最近次第に、わが國體の本義をならひつゝある、といふことである。これは、戰時下のナチス・ドイツに親しく足を運んで、各分野をつぶさに觀察し、研究して歸朝された藤澤親雄氏などのつよく指摘されるところである。

氏によれば、ゲルマン古代の民族的世界觀を再興したナチスが、政權を掌握して以來、いまゝでの大學などで講ぜられてきた自由主義的國家學における國家三

要素說（國家を主權・人民・土地の三要素から成立する支配機構であると說明する）が、根本から動搖し、ドイツ語のいはゆるシュタートの意味の國家觀念が權威を失つて、これに代つて、フォルクスゲマインシャフト（民族協同體）が新興國家學の中核的な生命理念となり、主權・人民・領土の舊國家秩序が崩壞して、これに代つて、指導・民族・生命圈の新國家秩序が建設され、新しいドイツの國家はその本質において、シュタートでなくして、ライヒであり、生命なき權力機構でなくして、つねに生成發展してやまぬ民族協同體であり、支配さるべきものでなくして、指導せらるべきものであり、かゝる生命的國家における有機的成員は、相互に何の緣もない自由平等のいはゆる個人ではなくして、一つの民族生命の多元的顯現として同じ血に結ばれてゐる民族同胞である、といふやうな考へ方に進んでゐる。これは、まさしく、わが邦における「くに」の觀念に近いものである、

といふのである。

また、ナチスの考へる歐洲新秩序といふものゝ構想についても、氏によれば、そこでは、「一即多、多即一」といふ東洋哲學の原理が追求されてをる。すなはち獨伊は、軍事的にも、政治的にも、經濟的にも、文化的にも、全歐洲を指導するが、自國の利益だけを考へて行動するものではない。「公益は私益に優先す」といふ全體主義の根本原理にしたがつて、大乘的に、歐洲のすべての國をして、みなそのところを得せしめ、共存共榮し得るように心懸けねばならぬ、第二次歐洲戰爭は、この意味での道義性をふくむ。單に、英佛に代つて獨伊が歐洲のヘゲモニーを握るといつたやうな淺はかなものでない。新歐洲秩序における各國は、歐洲全體の防衛と發展とに牴觸しないかぎり、自由に、自國の政策を究め得る。歐洲共榮圈全體の將來の運命決をするやうな重大な政治・經濟・外交・軍事・財政・

交通などの問題は、指導國家たるドイツに委せ、この大方針に矛盾せぬかぎりにおいて廣汎な自由が、各國にあたへられる、といふのが、歐洲の政治的新體制の構想理念のやうである。

かうなると、たしかに、ナチスとファッシズムの全體主義的理念と日本の皇國的理念とは、その世界新秩序の建設の營みにおいて、近似せる關係をもつにいたつてゐる。すくなくも、これらの建設理念は、明瞭に英米の自由主義・個人主義的理念と相對立する立場にあるわけである。

× × × × ×

とまれ、皇國の世界政策は、肇國以來、萬邦萬民をしてそのところを得しむるの八紘爲宇の大義を基調としてゐるのであるから、そこに、まさしく、世界無比の國體のありがたさがあるわけである。皇國政治は、單なる獨裁にあらず、デモクラシーにあらず、さればといつて、單なる全體主義にあらず、個人主義にあらず、八紘爲宇の大義による融通無礙なるもろ〳〵の主義の綜合政治であるともいへやうか。かやうな政治理念あればこそ、數多くの國家や民族を包容しつゝ、しかも、その間、なんらの矛盾もなく、摩擦もなく、渾然一體たる皇德精神の和の姿あるのみである。肇國このかた、かゝる皇道政治の根本理念がみな失はれずに、悠久三千年の建設道を歩みきたつたのである。いまこそ、この光輝ある皇道政治理念を昂揚し、廣大無邊なる皇謨を顯現して、大東亞乃至世界の誤れる英米體制を排擊して、一大新體制を戰爭と建設によつて、展開し擴充すべきときであるのだ。

× × × × × ×

から考へてくると、こゝで、さらに、大きな課題が、われ〳〵にあたへられるわけである。ほかでもない、大東亞戰爭への突入によつて、いや應なしに、皇道精神による大東亞の新建設を遂行し、新しい世界秩序の再建設に乘出し着手せねばならなくなつたわが國が、わが國みづからの國內體制をこのまゝにして置いてやつてゆけるのか、といふことである。わが國みづからの體制が肇國以來の國體に合致した政治・經濟・文化・教育・思想その他もろ〳〵の皇道體制になつてゐるならば、またなにをかいはんやであるが、明治維新このかた、急激な西歐物質文明の輸入による國家體制整備に沒頭してきたわが國として、一應已むを得ない事情にあるとして、はたして、西歐式英米思想、米英的心情にこびりついた部面はな

いか。政治・經濟・思想・教育・文化・社會その他ありとあらゆる部面において、明治維新以來の日本の姿を、こゝで、眞劍に考へ直す必要はないのか。米英と戰爭をなし、米英の勢力を大東亞から驅逐し、米英式の自由主義・個人主義による大東亞秩序や世界秩序を覆へして、新たなる正義にもとづく秩序をうち立てようといふ乾坤一擲、民族興亡を賭けたるの瀨戸際において、まだ、各個人が、各分野が、米英式に惑める自由主義・個人主義思想に未練を感じ、しかも、それを絕對の眞理・正義と感違ひをしてゐる徒輩は、ゐないか。ゐるとすれば、この際、徹底的に、精神的・思想的・文化的對米英戰を戰ひぬかねばならぬ。

大東亞戰爭の總力戰的意義は、この意味でも、大きく考へ究められねばならないのである。

大東亞戰爭の目標は、いまゝで世界を支配してゐた米英勢力を、武力的に、徹

底的に叩くことに在るのみでなく、同時に、われ〳〵の間に執拗に巣喰ふ米英式の思想形態・文化形態を、一つ強力に、へし曲げて、世界の姿を八紘爲宇の大義によつて、清淨化するに在るのである。

かくして、大東亞戰爭および、これとつながりをもつ歐洲戰爭は、大世界戰爭の形において、今後、久しきにわたつて行はるべき人類間の偉大なる建設戰爭であるといふことになる。

われわれは、こゝで、大いなる人類の世紀の曙を期待すべきである。將に明けゆく人類の新世紀の曙は、われわれ人類の、かねてひさしく待ち詫びた新世界體制への眞近い序曲を奏づる妙なる建設譜なのである。

まことに、思ひみるだに、血湧き肉躍り、心ゆたかなる心地のすることである。

われわれ皇國民一億が、この大東亞戰爭の開始にあたつて、かの昭和十六年十二月八日（一九四一年）朝にみられたるごとき、民族的緊張と感激を體驗したといふことは、まことに、それだけでも、世界史的意義大なりといふべきである。

大東亞の戰爭と建設への歩み

その一、皇國史上の對外戰爭

×

「戰爭と建設」といふあたまで、皇國日本が、肇國以來經驗してきた對外戰爭のかづ〳〵について考へてみると、歴史は、あきらかに、對外戰爭の後には、かならず、建設が行はれたことを示して居り、その戰爭も、おほむね、皇國々力の發展の前途に、已むに已まれずして、挑まれた戰爭であつたことを示して居る。これは、われわれのとくに意をとゞめねばならぬことだと思ふ。

×　×

日本が歴史上、大東亞戰爭までに經驗した對外戰爭は、といへば、國民學校の兒童でも、ハッキリ答へるであらうやうに、遠い古代の神功皇后新羅御親征がその一つ、元寇に對する抗戰がその二つ、文祿慶長の豊太閤の朝鮮遠征がその三つ、日清戰爭がその四つ、日露戰爭がその五つ、第一次世界大戰の對獨戰爭がその六つ、そして、滿洲事變・支那事變がその七つである。

大東亞戰爭にいたるまでの以上七つの戰爭には、それ〳〵の目的・意義・經緯があり、かならずしも、一樣でないのであるが、しかも、そのいづれの戰爭をみても、歐米諸國の植民地奪略のやうな慘虐の事例もなければ、アヘン戰爭のやうな不義の戰の跡もないばかりでなく、つねに、日本をめぐる世界と時代の動向に

敏感だつたそのとき〳〵の指導者が、眞正なる平和を確立するといふ深遠な道義的動機から、より大いなる秩序の建設をめざして戰爭した事實のみである。

× × ×

神功皇后の御親征は、いふまでもなく、今日の米英の援蔣のやうに、九州熊襲を背後から支援・使嗾しつゝあつた新羅を征することが目的であつたのであるが、征戰は、又に血ぬらさずして、新羅王の降服といふことで終結したばかりでなく、皇后の御親征の御意圖は、史家の論證によれば、あきらかに、當時の朝鮮海峽と對馬海峽を內海とする古代文化圈を復舊し、皇國みづからその主體となつて、さらに一段と進步發展せしめんとされるにあつたものゝごとくである。しかりとせば、御親征は、まさしく、日本における最初の「建設のための戰爭」であつたとみるべき

である。事實、御親征によつて營まれた建設は、新羅・百濟・高句麗による大陸文化の對日移入といふ具體的內容をもつて現れ、わが文化の進展がこれによつて一段と推進されたことは、疑ない。蠶業その他の產業技術や財政運用上の進步あり、學術宗教その他の精神文化上の刺戟あり。これらは、ひいては、大化の改新の鴻業、飛鳥時代の文化の實現に對しても、大きな促進的役割を營んだのであるから、皇后の御親征は日本における戰爭と建設の現段階を考へるわれわれに無限の示唆をあたへざるを得ないのである。

× × ×

元寇による抗戰は、日本の對外戰爭中唯一の防禦戰であつた。文永年間と弘安年間と二度の來寇も、ありがたき伊勢の神風と、相模太郎時宗の斷乎たる勇斷と、

國民の血管に流るゝ神秘なる愛國の至情とによつて、つひに、見事に、これを擊退し去り、わが神州は、成吉思汗の馬蹄下より免れ事無きをえたのであるが、元來が守勢の戰であつたから、容易ならぬ戰ではあつた。さすがの幕府も、守勢の戰の不利を覺り、むしろ、斷乎蒙古征討の水軍をいだすべし、と決定、諸國の勇敢なる武士ども、續々この擧に勇み加はらんとしたほどであつたが、この攻勢が、まだ本格化しないうちに、敵の第二回の來寇に遭つたためだといはれる。從つて、戰爭と建設といふ面から、この對外戰爭には、表面は、格別の成果もなかつたのであるが、しかし、國家の總力を國防に集中した日本精神の昂揚といふ一點からかへりみるときは、いかなる國難に直面しても、いかなる屈辱に遭遇しても、斷乎として、これに反撥し、これを克服せずんば已まぬ、たけき日本の國民精神の姿をハッキリさした一事は、日本國史上においても、稀にみる光輝ある思想建設

とみるべきものであらう。この時代の國の上下擧げての國防態勢は、消極的ながらも、日本國威の發揚、皇國理想への邁進を、一段と推進したもので、後代の眞の日本再建設に對する一の動因となつたことを想起すべきである。

× × × ×

秀吉の試みた文祿慶長の兩役の主目的が、征明にあつたことは、史家のひとしくみとめるところであるが、しかし、その征明の目的いかんといふことになると、諸說行はれて、かならずしも、明かでないといはれる。

當時のわが國をめぐる東亞の情勢は、たとへば明の國勢漸く傾いて、國家的權威を失ひつゝあり、朝鮮王室の力も衰へつゝあり、わが日本も、時まさに群雄割據の戰國時代で、いまだ國內統一もみられぬ時代であるなど、はなはだ紛糾をき

はめてゐた反面において、歐洲諸國は、宗教と貿易と武力でもつて、東洋侵略を着々と遂行しつゝある時代であつたから、かうした世界の大勢が、ポッ〳〵情報として秀吉の耳にも入り、つひに東洋の平和確立のための大明征伐の斷行を決意したのである、といふ考へ方に、われわれは、大きな示唆をあたへられるものである。滿洲事變、支那事變を通じてのわが日本の對支征戰の意圖が領土的野心に基くものでなく、支那の背後にかくれて、東洋侵略の野望を遂げんとしつゝある英米西歐諸勢力を驅逐し、もつて、アジア人のためのアジア、東亞の新秩序を確立するにあるといふ現代皇國戰爭理念は、遠く秀吉の頃においても、形は領土擴大の形であつても、その眞意において、東洋平和の確立、理想的日本の確立、擴張、いはゆる「まつらはぬものに對する荒魂の發現」といふ遠大な皇國理想主義が懷かれてゐたものと解する史家があるが、から考へ得てこそ、秀吉の擧も、無名の戰の謗から免かれ、皇國における戰爭と建設の歷史における大きな意味をもつことになるわけであると思ふ。

× × × × ×

日清戰爭は、いろ〳〵の經緯はあつたものの、要するに、明治維新後、急速な勢で近代國家としての成長を遂げ、東亞に迫り來る西歐勢力に對して、東亞の安定勢力たる地位を自覺した日本が、その目標の下に大陸政策を遂行してゆく第一階梯として、朝鮮問題をとりあげ、朝鮮の事大主義の因をなす背後の諸勢力の禍根を絕たんとした戰爭にほかならないのである。

明治二十七年（一八九四年）八月二日明治天皇の下し給ふた對清宣戰の大詔には、つぎのやうに仰せられてあつた。

朝鮮ハ帝國カ其ノ始ニ啓誘シテ列國ノ伍伴ニ就カシメタル獨立ノ一國タリ而シテ清國ハ每ニ自ラ朝鮮ヲ以テ屬邦ト稱シ陰ニ陽ニ其ノ內政ニ干涉シ其ノ內亂アルニ於テ國ヲ屬邦ノ拯難ニ籍キ兵ヲ朝鮮ニ出シタリ朕ハ明治十五年ノ條約ニ依リ兵ヲ出シテ變ニ備ヘシメ更ニ朝鮮ヲシテ禍亂ヲ永遠ニ免レ治安ヲ將來ニ保タシメ以テ東洋全局ノ平和ヲ維新セムント欲シ先ツ清國ニ告クルニ協同事ニ從ハムコトヲ以テシタルニ清國ハ飜テ種々ノ辭柄ヲ設ケ之ヲ拒ミタリ帝國ハ是ニ於テ朝鮮ニ勸ムルニ其ノ秕政ヲ釐革シ內ハ治安ノ基ヲ堅クシ外ハ獨立國ノ權義ヲ全クセムコトヲ以テシタルニ朝鮮ハ既ニ之ヲ肯諾シタルモ清國ハ終始陰ニ居テ百方其ノ目的ヲ妨碍シ剩ヘ辭ヲ左右ニ托シ時機ヲ緩ニシ以テ其ノ水陸ノ兵備ヲ整ヘ一旦成ルヲ告クルヤ直ニ其ノ兵力ヲ以テ其ノ欲望ヲ達セムトシ更ニ大兵ヲ韓土ニ派シ我艦ヲ韓海ニ要擊シ殆ト亡狀ヲ極メタリ

當時の清國も、まさしく現在の支那政府を援護する米英の立場にあつたので、韓國の安泰を確保し、東洋平和の安定を確立するには、皇國として、どうしても、背後の清國を討たねばならぬ絕對の立場にあつた。これも、東亞秩序の建設をめざす日本の歷史的主體的地位がさうさせたのであつたのであつて、歐米の東亞支配を拒む實力を日本は年每に强めて行くことになつたのである。

× × × × × ×

そして、明治三十七年（一九〇四年）、對露戰爭にいたつては、あきらかに、日本のこの理想、東亞永遠の平和確立といふ大理想實現のために、支那及び韓國の背後にあつて侵略の爪牙を磨きつゝあつた當時の西歐屈指の强國露國を相手とした一大戰爭にほかならなかつた。同年二月十日煥發し給ふた宣戰の大詔には、

かう仰せられた。

帝國ノ重ヲ韓國ノ保全ニ置クヤ一日ノ故ニ非ス是レ兩國累世ノ關係ニ因ルノミナラス韓國ノ存亡ハ實ニ帝國安危ノ繫ル所タレハナリ然ルニ露國ハ其ノ清國トノ盟約及列國ニ對スル累次ノ宣言ニ拘ハラス依然滿洲ニ占據シ益々其ノ地歩ヲ鞏固ニシテ終ニ之ヲ併呑セムトス若シ滿洲ニシテ露國ノ領有ニ歸センカ韓國ノ保全ハ支持スルニ由ナク極東ノ平和亦素ヨリ望ムヘカラス故ニ朕ハ此ノ機ニ際シテ切ニ妥協ニ由テ時局ヲ解決シ以テ平和ヲ恒久ニ維新セムコトヲ期シ有司ヲシテ露國ニ提議シ半歳ノ久シキニ亘リテ屢次折衝ヲ重ネシメタルモ露國ハ一モ交讓ノ精神ヲ以テ之ヲ迎ヘス曠日彌久徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメ陽ニ平和ヲ唱道シ陰ニ海陸ノ軍備ヲ增大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス

この當時の露國もまた、あたかも現在の米英の立場にあつたのであり、この野望を叩かずして、東亞の平和得て望むべくもなかつたのである。

日露戰爭の終了後數年を經て、日本は、つひに、東洋平和安定の第一礎石として、韓國併合を斷行した。すでに、日本の前に敗退した支那と露國とは、日本の道義的な自衛手段のまへに手も足も出しえなかつたのである。

× × × × × × ×

そして、つひに、第一次歐洲大戰における日獨戰爭であるが、この戰爭は、いはゆる戰爭と建設といふ見地からみて、先の戰爭ほどの意義はない。日本の參戰は、たゞ、日英同盟の國際友誼によつたゞけで、大した道義的理想はみとめえられなかつた。しかも、參戰に對する報謝は、單に南洋群島の委任統治など二三のものにすぎなかつた。元來この大戰は「世界戰爭」と稱するに値しないのにもか

かはらず、あへてさう稱するのは、歐米をもつて世界となす思想に外ならないのである。

大戰の結果は、英米等アングロサクソンの世界制覇の野望は、益々達し易い情勢になつた。敗戰のロシアは、もと〳〵革命で瓦壞したのでそのまゝ大した手配も要らぬと考へられ(これは今日からかへりみれば、ドイツの場合と同樣の手拔かりであつた)、ドイツは今後何百年經つても再起できぬことを目標に酷遇され、戰勝國イタリヤなどの分け前はホンの輕くあしらはれ、日本その他の有色人種國も、戰勝の曉になつてみれば、劍もホロ〳〵の扱ひ方であつたばかりでなく、いまや、歐洲を牛耳つた英米は、公然と、東亞にも野望を露骨にしはじめ、東亞の中核日本を、事毎に、邪魔扱ひにし、弱體化工作を弄しはじめた。

滿洲事變、支那事變といふ、日本第七番目の對外戰爭は、かうした揚句の果て

の結果であることは、いはずとしれたことである。したがつて、この兩事變は、いまさらいふまでもなく、滿蒙より、支那より、英米西歐勢力を驅逐して、こゝに立派な自主的の東亞圈を建設することを主眼としてゐた。名を「事變」といつて「戰爭」といはぬのは、當然である。支那の反省を促して、相共に、東亞の平和を確立するのが目的なので、しひて戰爭といへば、「聖戰」といふほかないのである。

支那事變に際し召集せられた第七十二回帝國議會開院式(昭和十二年九月四日)の勅語には、つぎのやうに、仰せられてゐる。

帝國ト中華民國トノ提携協力ニ依リ東亞ノ安定ヲ確保シ以テ共榮ノ實ヲ擧クルハ是レ朕カ夙夜軫念措カサル所ナリ中華民國深ク帝國ノ眞意ヲ解セス濫リニ事ヲ構ヘ遂ニ今次ノ事變ヲ見ルニ至ル朕之ヲ憾トス今ヤ朕カ軍人ハ百難ヲ排シ

テ其ノ忠勇ヲ致シツヽアリ是レ一ニ中華民國ノ反省ヲ促シ速ニ東亞ノ平和ヲ確立セムトスルニ外ナラス

朕ハ帝國臣民カ今日ノ時局ニ鑑ミ忠誠公ニ奉シ和協心ヲ一ニシ賛襄以テ所期ノ目的ヲ達成セムコトヲ望ム

この勅語に仰せらるるごとく、日本の大陸政策、その非常手段としての武力行使は、いづれも、明治以降今日にいたるまでの一貫した東亞の平和確立、すなはち興亞政策の連續であるといふことを、われわれは、よく銘記せねばならぬのである。

その二、英米の東亞侵略

×

東洋の歴史をひもどくものが、誰でも氣づくやうに、近世の東洋史は、いはゞ西歐勢力東漸の歴史であつた。

こゝろみに、近代歐米諸國の東亞侵略の跡を素描してみよう。

十五、六世紀のころ、いちはやく、近代的殖民活動を口火を切つた國の名は、ポルトガルとスペインであつた。

ローマ法王によつて東へ！といはれたポルトガルは、一路東へ向つた。西へ！

といはれたスペインは、一路西を目指した。

東方へ向つたポルトガルのヴアスコ・ダ・ガマがアフリカの南端、希望峰を廻航して印度へ向つたのが一四九九年であつたし、西方を目指したスペインのクリストフア・コロンブスが世界球形説を實證したのが一四九二年、コロンブスの西航による東洋への航路發見は、やがて、アメリゴ・ベスプツチによるアメリカ大陸の發見となつた。そして、バスコ・ヌニエス・デ・バルボアが、パナマ地峽に上陸したのが一五一三年、マゼランが、南米大陸南端の海峽を通過して、はじめて洋々たる太平洋に出たのが、一五一九年であつた。

十五、六世紀の交、世界は、ポルトガルとスペインとの往年の二大先進國によつて、はじめての植民地的分割を經驗したのであつた。これは、いはゞ近代世界における殖民地的活動の第一期をなすものである。

かくて、その第二期は、十六世紀の後半、フランス、オランダ、イギリスの三大先進國の活動を中心として、展開された。

一五八八年スペインの無敵艦隊を撃滅したイギリスが、まづ、スペイン海洋國家に代る地歩を獲得した。イギリスの東印度會社設立は、一六〇〇年、つゞいてオランダ(一六〇二年)、フランス(一六〇四年)、デンマーク(一六一一年)の東亞侵蝕のための殖民會社も、つぎ〳〵と、設立された。

しかし、わけても、活潑な侵略活動の展開者は、イギリスであつた。スペインの無敵艦隊撃滅以來の世界に誇る強大海軍力と、世界最初の產業革命の經驗による經濟的發展とが、イギリス殖民帝國の存立を、きはめて堅固なものにしたのである。

しかも、イギリスの殖民政策は、東亞の天地において、およそ考へられるかぎ

りの猛威をふるつた。

大體、近代的西歐殖民活動の特質は、俗にいふ弱肉强食、適者生存、優勝劣敗といふことを根本の基調とし、政治經濟的方法として、帝國主義をとつたといはれるところであるが、とくに、きはだつた代表的近代的殖民活動は、ほかならぬイギリスによつて營まれたのである。

インドも、ビルマも、マレーも、そしてオーストラリヤも、目星しい東亞資源地域は、そのほとんど大部分が、十九世紀にいたるまでに、すでにイギリスの老巧な手管で料理されてゐた。

かつて世界屈指の農業國であつたインドは、イギリスの手がのびてからは、年毎に、痩せ犬のやうに衰へて行つた。農產物は思ひきり安價でそつくりさらはれ、住民は、いや應なしに、イギリスの高い商品を賣りつけられ、苦境から逃れやう

として工面にあせるものは、高利の貸金で身動きもならぬ金縛りの痛苦を嘗める外ない、といふ狀態となつた。

わが日本の二十倍もある廣大なオーストラリヤも、住民は、次第に、うち滅されて、わづかのイギリス人による獨占的支配の下に立たされた。ビルマ、マレーすべてしかり。

一八三九年の有名なアヘン戰爭によつて、支那貿易の確保に成功したイギリスは、香港、廣東と、支那の要所々々をうちかためて、徐々に東亞全域支配の野望を果たすべく、虎視のやうに耽々たるものがあつたのである。

アメリカの東亞侵略は、イギリスよりはずつと遲れてはじめられた。米使のわが浦賀に來り通商を求めたのが一八四六年、しかも、日本領土併呑の野望を遂げかねた後、一八九八年(明治三十一年)ハワイに革命を起させ、その騷ぎにつ

けこんで、これを占領し、同年さらに、スペインに戰爭をうりつけて、フイリッピン、グアムを獲得した。わが國に二十倍もする廣大な國土を有しながら、なほこれにあきたらず、太平洋を越へて東亞にまで手をのばし、豚のごとき物質繁榮を基礎づけるための殖民地獲得に狂奔してゐたのである。

× ×

大體、かういつた西歐の東亞侵略の模樣であつたのであるから、皇國日本にして、よく幕府三百年の夢をうち破らず、うやむやのうちに、萬事これら海賊的侵略國のなすがまゝに狂奔したのであつたならば、今頃は、どうなつてゐたことであらう。まことに、危い話であつた。おそらく、インドや支那と同じやうな苦汁を吸はされてゐたかもしれぬ。

神靈上に在り、皇國・皇民の自覺は、かうした魔の觸手が近づくにしたがつて、ハッキリと把握された。そして、光輝ある國體の精華、皇國本然の姿が、立派に確立されて、明治の御一新となつた。東亞侵略を逞うせんとする西歐、（とくに）英米の野望は、この皇國の完全なる再建設の前に、一應、うち拒まれた形どなつた。しかも、明治維新による皇國の毅然たる立直りによつて、もろくも當面の侵略活動をなす餘地を喪失したにも拘らず、英米その他の西歐諸國は、しかもなほ、東亞侵略の野望を捨てず、東亞における日本の立直り、興隆を喜ばず、事あるごとに、朝鮮、滿洲、支那、ロシヤなどの周邊諸國の裏面に廻つて、日本の國力消耗を企圖した。

明治維新以來の皇國は、急激なる文化的切換へに直面し、數十年も數百年ものハンデイキャップに苦しみつゝも、とにかく、日清戰爭、日露戰爭と戰ひぬいて

きた。表面の敵は、清國であり、露國であつても、裏面は、これらの背後に、侵略の機會を狙ふ貪慾な豺狼どもであつたことを知らねばならぬ。

しかも、皇國は、御稜威の下、清國にも露國にも、決定的な勝利を獲得し、着々、東亞安定のための皇國のもつ指導的地位を確保することができた。一方また、西歐のあらゆる文化を輸入し、消化し、活用して、政治・經濟・教育・文化のあらゆる體制において、西歐に比肩するまでの發展ぶりを、短年月の間に、なしとげることができたのである。

× × ×

世界の大半を植民地とし、東亞の諸資源をも獨占せんとする英米西歐諸國にとつて、日本の興隆は、大きな障碍となつた。何とかしてこれをうちひしぎ、東亞乃至世界をことゞ〳〵く、自己の支配下におくのが、英米年來の野望であつたからである。

しかし、歴史は、さう英米の都合のいいやうにばかりは動くものではないとみえる。時あたかも一八七〇年（明治三年）の普佛戰爭におけるプロシヤの勝利、プロシヤによるドイツ統一の實現以來、急速に勃興し來つたドイツが、必然的に、イギリスとの衝突を免れないことになつた。

一八三〇年の產業革命以來八〇年ばかりの短年月の間に、ヨーロッパ隨一の產業國家に發展したドイツは、その國内工業の原料資源獲得のために、遲ればせながら、海外植民地の獲得を企圖せねばならなかつたのである。地球上重要な領域を、すでに、大半、イギリス・フランス・オランダなどに占められてゐたので、差當りは、その殘餘の太平洋上の諸島とアフリカ内部の諸地域のみで滿足せねば

ならなかつたが、とめどなき經濟發展のためには、こんな小範圍の殖民地で足るわけがなかつた。そこで、手をのばして、ドイツのバルカン政策、アフリカ政策が、眞劍に遂行された。しかし、結果は、先進の英・佛・露・その他との衝突以外になかつたのである。

一九一四年（大正三年）の七月、かうした揚句の果て開始された第一次歐洲大戰は、結局のところ、これら貪慾な侵略國群の間に展開された醜惡な鬪爭以上の何ものでもなかつたのである。

しかし、國際道義を貴ぶ皇國日本は、日英同盟の誼を重んじて、イギリス側に立つてこの戰爭に參加した。日本の海軍は、太平洋におけるイギリス側の絶大なる保障となり、とくに、イギリス本國と殖民地との交通連絡の確保に努力し、地中海まで出動して、その任務を全うした。

なんといふ崇高な國際道義感であらう。

しかも、大戰の結果は、もちろん、聯合國側に勝利が訪れた。皇國の參加がなかつたならば、はたしてどういふことになつてゐたかは、しれたものでない。

大戰の勝利は、イギリスとアメリカとフランスの壓倒的興隆を齎らすことになつた。その他の國は、敗北國はいふまでもなく、勝利國といへども、大した利益もうけなかつた。まことに奇怪な話であるが、事實はさうだつたのであるから、仕方がない。

第一次世界戰爭は、要するに、イギリスとドイツが世界制覇を爭つた一戰であつたのであるから、大戰後の世界は、勢ひ、イギリス、そしてアメリカの支配下に置かれさうな氣配をしめすことになつた。政治的には、英佛中心の國際聯盟の造成による世界各國の統御が行はれ、經濟的には、ユダヤ的金權主義による米英

獨占資本の形成が行はれ、そして思想的には、英米的デモクラシー思想の傳播が行はれ、いまや、自由主義的米英思想による世界秩序こそが、神の地上に命じ給ふた絶大無二の秩序であるかのごとき氣配を示した。

自己の覇望を遂げるために惹き起した大戰爭の勝利を、あたかも、自國一個の力で獲得したかのごとく、イギリスの大戰後の世界政策は、運ばれた。國內革命で、いち早く陣營から姿を消したロシアのごときは別として、國內政治の腐敗と共產主義思想の侵略のために敗れたドイツのごときは、將來二度と起ち得ない狙ひの下に、天文學的賠償金を課され殖民地を奪取されたし、戰勝國イタリヤのごときは、あたかも戰敗國のごとき扱ひで、聯合國側に參戰の際約束された英伊密約も弊履のごとく棄て去られた。そして、大戰後の世界におけるアングロサクソン跋扈の唯一最大の障碍は、東亞における皇國日本のみといふことになつた。

同盟の國際信誼を重しとしてイギリス側に參戰した日本を、イギリスとしては、要するに、大戰が勝利を以て終結するまでの御用提灯ぐらゐにしか考へてゐなかつたのである。戰爭後、西歐諸國の疲弊に乘じて、いちぢるしく國力を增大しつゝあつた東亞日本の擡頭は、戰が濟んでみれば、イギリスやアメリカやフランスにとつては、ドイツ以上の新しい脅威となつたのである。

だから、大戰後のイギリス、アメリカの日本に對する仕打ちは、一から一まで日本の東亞安定勢力としての地位から、何とかして、引きずり降さう、何とかして國力を弱體化せしめようといふことでしかなかつた。

念のために、その主要なものだけあげると、四つある。

第一に、ヴエルサイユ媾和會議に、日本から提出された人種平等案は、すげなく、否決され、參戰にあたつて英佛との間にできてゐた山東の特殊權益は、ひど

い壓迫をうけた。

第二に、大正十年（一九二一年）のワシントン會議において、英・米・日の海軍勢力を五・五・三の比率と定めて强行し、太平洋における日本の海上勢力の抑壓を企てた。

第三に、翌十一年（一九二二年）の支那に關する九箇國條約で、支那の領土保全の美名のもとに、日本の東亞における地理上、歴史上、人種上もつ多くの政治經濟的特殊權益を否認し、日本を大陸から〆め出すことを企てた。

第四に、昭和五年（一九三〇年）のロンドン軍縮會議では、補助艦協定を根幹として、アメリカに對し、總計七割にちかい程度に、日本海軍力制限を强行した。

× × × ×

しかし、考へてみれば、英米のかうした惡どい日本壓迫も、日本自體がしつかりしてゐれば、ある程度まで、反撥し得たのであつたかもしれないのであるが、いかんせん、世界大戰後十餘年間の日本といふものは、あたかも魔がさしたかのごとく、政治・經濟・思想・文化アらゆる分野にわたつて、墮落し沈替し腐敗してゐた。政治の面では、デモクラシーの中毒で、政黨政治の腐敗がみられ、その外交部面では、英米追隨の國際協調主義が横行し、思想の面では、自由主義・個人主義の滲透に加ふるに共產主義の侵入さへ見られ、その經濟の面では、基礎產業の原料を外國に仰ぐ貿易國家の成立、英米ユダヤ金融資本への無我奉仕がみられ、その他、敎育・文化・社會の各部面に滔々として米英思想の洗禮が行はれ、そこ

に、肇國以來の皇國精神・國體の精華のごときは、日本人の腦裡から、物の考へ方から、危うく消え去りかけてゐた。

言葉をかへていへば、前にかゝげた政治外交上の日本壓迫は表面の手で、裏面には、かうした思想上、經濟上、文化上の日本弱化の手が執拗にさし伸べられてゐたとみるべきである。

東亞の中核、その安定勢力として、東亞諸國を率ゐて起つべきはづの日本は、大正から昭和の初期にかけて、かうしたアングロサクソンの毒手によつて、危うく、全身痳痺の危地に陷れられ、もはや大陸の同胞が大陸からさへ手を引いて日本にかへらねばならぬほどの逆境に追ひつめられたのである。

しかし、神國日本が、いつまでも、かうした痳痺のために、むざ〳〵米英の爪牙にかゝつて、あへない最後を遂げるはづはない。肇國二千六百年の光輝ある皇

國、日本にあたへられた天の使命が、無になつてしまうはづはない。

十有餘年の逆境期においてさへ、皇國の一部には、なほ、頑強なる英米の魔手をもつてしてもつひにいかんともなし得なかつた尊い日本的存在が儼としてみられたのである。

そして、まづ、最初の反撥が、滿洲事變となつて現はれた。昭和六年（一九三一年）九月十八日、柳條溝邊の一爆發は、つひに、東亞の一角滿洲の曠野に、革新日本の烽火となつて轟いたのである。滿洲事變は、けつして、一部支那兵との單なる衝突ではない。英米を背景とした排日侮日に狂奔する支那に對する皇國の一大鐵槌であり、いひ換へれば、東亞より英米の勢力を追ひ拂つて、眞のアジア人のアジアを、眞の大東亞を建設するための、そも〳〵の第一擊であつたのである。この點は、われわれの十分に注意すべき點であると思ふ。

要するに、日清、日露の兩戰爭によつて、現實の方向をあたへられた東亞建設は、久しき年を隔てゝ、この滿洲事變により、ハッキリと日本の歷史的動向のなかに刻みこまれたのである。日本自體も隣邦支那も大東亞地域も、そのすべてが、アングロアクソンの侵略の前に危うく屈服し去らうとしたその瞬間に、神國日本の猛烈な起ち直り、反擊が行はれたのであるが、これは、別にドイツの動向をのべる際にもふれるやうに、アングロサクソンによる利益的世界秩序が、新しい道義的世界秩序に生れかはる世界の大きな歷史的轉換に第一石を投じたものとして、その意義をくみとらねばならぬのである。

ヴエルサイユ條約と國際聯盟とによつてデッチあげた得手勝手な世界秩序をそのまゝ何百年何千年と維持してゆくことは、大戰後の英米佛の信條であつたのであるから、現狀維持に反するいかなる世界の動きにも、眞向から、反擊を加へることが、英米の唯一かつ重要な世界政策であつた。したがつて、日本が大陸の一角で猛烈な動きをみせたときの英米舊勢力の驚愕もさることながら、はたして、世界の與國四十何國かを誘つて日本攻擊に出たことは彼等として當然のことであつた。

そして、かゝる世界維新の第一歩をふみ出した日本が、國際聯盟にいつまでも停ることのナンセンスたることも、また當然のことであつた。昭和八年（一九三三年）三月二十七日、國際聯盟脫退の詔書は煥發あらせられた。一億國民感激を新たにして、いまこそ、アングロサクソンの尻馬乘りを止めた。そして皇國獨自の國際道濶歩をなすべき決意を固めたのであつた。

滿洲事變の結果、日本の一體不可分の國として、滿洲に獨立國が建設された。滿洲國の建設こそは、まことの大東亞建設の第一着手にほかならなかつたのである。

× × × ×

滿洲の一角において敗退した英米は、さらに、支那の蔣介石を使嗾(しそう)して、着々對日戰備を整へさした。そして、その結果は、いや應なしに、支那事變の勃發を誘引するにいたつたのである。直接表面の相手が、支那であるから、「支那事變」といふが、間接裏面の相手からすれば、對米英事變であり、いはゞ大東亞戰爭そのものにほかならないものであつた。アメリカの飛行機を用ひ、イギリスの機關銃をもつた支那兵を相手の戰爭が、どうして單なる「支那」事變でありえやうか。

支那事變は、ついに、執拗なる背後の援助勢力のために、本尊の蔣介石は、重慶山麓の山賊的存在に隨しながらも、なほ數ヶ年の抗戰を絶叫し、日本の國力消耗を待ちつゝゲリラ戰で生きのびてゐるのであるから、所詮、支那事變の徹底的處理方法としては、その背後の英米勢力の擊滅、その東亞よりの驅逐、つまり、大東亞戰の開始以外になかつたといふべきである。支那大陸からも、南方の諸島からも、ことゞ〳〵く英米等西歐諸國の舊勢力を排除して、新しい東亞の秩序を確立し、あらゆる分野において自存自立の體制をとつて、世界平和の確立に邁進することは、どつちみち、皇國のいづれの日にか、とらねばならぬ方策であつたのである。

しかし、昭和十六年（一九四一年）十二月八日、宣戰の大詔を拜して、いよ〳〵大東亞戰爭に突入してみれば、わが大東亞建設戰爭の目標は、單に、米英の勢力を東亞の天地から追拂ひ大東亞諸民族を解放するばかりでは足りぬ、長らく猛威をふるつたアングロサクソン世界舊秩序を打破して、根本的に革新せられた世界新秩序を建設すること、從つて、この世界から、英米兩勢力を徹底的に粉碎し

てしまふことにあることが判つたのである。

そこに、われわれは、大東亞戰爭と大東亞建設の世界史的意義をみとめうるとともに、この現前の戰爭と建設の大業が、いかに困難な、皇國の國運を賭しての大事業であるかを知らねばならぬのである。

ときあたかも、わが滿洲事變直後より、つひにナチス政府の手によつて、見事な復興建設を完成したドイツが、まさに、わが國の大東亞建設と相呼應するかのごとく、歐洲新秩序の建設に、絶大の努力を傾注しつゝある。しかも、目標を同じうする兩國は、その共同の敵に對して、力を合せ氣を共にして、當ることができる立場に立つてゐる。

この東西二つの新努力が、舊勢力を徹底的に擊滅して、新しい世界秩序を建設するところに、われわれは第二次世界戰爭の大きな歷史的意義をみとめねばならぬのである。

いひかへれば、大東亞戰爭は、日本的にいふと、明治維新このかたつゞけられてきた興亞政策の總決算をなすべき一戰であり、ひいて世界的にいふと、ドイツの新歐洲建設と相まつて、新しい世界秩序を生みだすべき一戰でもある。

この一戰が、日本としても、世界としても、どうしても戰はれねばならなかつた一戰であることは、上にのべたやうに日本自體の歷史、世界のもつ歷史の上からして、明かなことであるのである。

日本國防國家の綱領

×

日本において、總力戰體制、國防國家體制といふことが、世間に力づよく提唱されはじめたのは、滿洲事變二、三年の後のことであつたやうに思ふ。

むろん、事變の勃發といふことが、世界革新の烽火、昭和維新の口火であるといふ認識は、國内一部のものにはよく判つてゐたことであつたかもしれないが、なに分にも、政界、財界、經濟界、學界、新聞、民間各方面、いづれも思想混沌として、これぞといふ叡智もなく、能力もなく、たゞ、一部の國民が日本本然の國體を求め、現實の腐敗を悲しむのみであつたのである。

そのうち、滿洲事變の處理に直接の責任をもちかつこれを深く自覺した軍部がらで、漸く、指導的方向づけが行はれだし、昭和九年(一九三四年)すなはちドイツでは、ヒトラー政府成立の翌年の秋、陸軍省新聞班の手によつて、「國防の本義とその强化の提唱」といふことが勇敢に提唱され、惰眠をむさぼつてゐた日本各界に大きな衝動をあたへた。それは、あたかも、嵐の夜舵を失つて彷徨する船舶に行くべき方向を指示するといふ歷史的重要性をもつたものであつたが、何分にも、自らの理性を失ひ、健全な自己判斷の能力を欠いてゐた當時の政界・學界・經濟界その他から、猛烈な反擊をうけ、軍部も、よくこれに耐へて、なほも、眞摯な研究をおこたらず、着々、皇國政治への指導力の培養に努めたのである。

この「國防の本義とその强化の提唱」といふのは、形はさゝやかなパンフレッ

トであつたが、內容は、單なる市井の研究論文などにみられない迫力・情熱・確信・指導性・理想に充ちた歷史的な一大文獻として、わが國の國防國家發展史上、絕對の價値をもつものであると思ふ。

このパンフレットは、國防の本義をば國家生成發展の基本的活用の作用であるとなして、國防國家の觀念を定立し、その觀點から、當時の國防政策や、經濟政策・社會政策にいたるまで、その欠陷と對策とを展開し、「たゝかひは創造の父、文化の母」といふ有名な文句を提唱したのであるが、まことに、ドイツのルーデンドルフ將軍の「全體戰爭論」や、さては、ナチス黨のフエーダー綱領などにも匹敵し、むしろ、その雄大なる建設的・實際的構想において、それら以上のものであるとの評價さへあたへられた。このことは、日本の國防國家建設をかんがへるにあたつて、われわれの是非銘記しておかねばならぬ一事だらうと思ふ。

この國防國家の提唱以來、歷代の內閣の施政施策の指導原理も、おほむねこゝに置かれたのであるが、なにぶんにも長い年月、英米流の自由主義・個人主義國家として成長してきた國として、とくに、政治の自由主義、經濟の個人主義は、事每に猛烈な現狀維持の反發を試み、きはめて、ジグザグな歩みをしてきた。しかし、大東亞戰爭に入るまでに、一應の綱領が國民の前に提示され、すこしづゝでも實施に移されるにいたつてゐたことは、われわれの大きな喜びであり、强みであつたといはねばならぬ。

それは、第二次近衞內閣が、昭和十五年（一九四〇年）八月一日に發表した基本國策要綱とこの要綱にもとづいて、その後着々設定した各種政策確立の要綱である。これこそは、日本が、支那事變以來三年、滿洲事變以來九年を經て、はじめて、世界に誇示しうる日本的國防國家體制、日本的總力戰體制の建設綱領を設定

したものとして、はなはだ意義深いものであり、けつして、一近衛內閣の設定せる政策要綱たるにとどまることなく、爾後の日本の歩むべき國防國家體制への道を闡明したものと考ふべきである。

もつとも、この國防國家建設要綱は、大東亞戰爭一、二年前の設定にかゝり、その全部の實施遂行をみぬうちに、國防國家の地域的範圍が、確定的に、大東亞諸地域に擴大された。そして、大東亞「戰爭」を遂行しつゝ、大東亞國防國家の「建設」を遂行せねばならぬことになり、さきの基本國策要綱は、あらたに、大東亞建設要綱と相補完して、もつて、今後の大東亞日本、世界日本の「戰爭と建設」の基準となり、指導方針となることになつてゐるわけである。

われわれは、まづ、基本國策要綱を大略眺めて、皇國の國防國家建設體制をあきらかにし、つぎに、大東亞建設審議會の答申になる各種政策要綱を眺めて、日本の大東亞國防國家建設の體制をあきらかにしたいと思ふ。

× ×

支那事變後三ヶ年を經た昭和十五年（一九四〇年）八月一日、前言のごとく、時の近衛內閣は、「基本國策要綱」なる日本國防國家建設の基本綱領を閣議で決定し、發表した。

要するに、世界史的一大轉換期に際し、同じ世界史的目標の下に努力しつゝある盟邦ドイツ及イタリヤとの協力をいよ〳〵緊密にしつゝ、支那事變まで戰ひぬき、すゝんで世界の新秩序創造を積極的に指導するためには、日本みづからが强靱にして進歩的な高度國防國家を建設しなければならぬ、といふつよい國家的要請にもとづいて、わが國はじめての國防國家建設の指針を公權的にきめた

ものであつた。

書いてあることは、きはめてむづかしい表現をして居るのであるが、國防國家とはなにか、日本のそれは、いかなる精神いかなる內容をもつべきものか、といふことについて、ハッキリした指針をあたへたもので、その指針は、大東亞戰爭下の大東亞建設についても、おほむね格別の變更を要しない原則である。

世界は、いまや歷史的一大轉機に際會し、數個の國家群の生成發展を基調とする新なる政治經濟文化の創成を見んとし、皇國亦有史以來の大試練に直面す。この秋に當り、眞に肇國の大精神に基く皇國の國是を完遂せんとせば、右世界史的發展の必然的動向を把握して、庶政百般に亘り、速に基本的刷新を加へ、萬難を排して、國防國家體制の完成に邁進することを以て刻下喫緊の要務とす——といふ書き出しで、「根本方針」と「國防及外交」と「國內態勢の刷新」とを展示したのである。

× × ×

日本國防國家の根本方針としてかゝげられたことは、「皇國の國是は、八紘を一宇とする肇國の大精神に基き、世界平和の確立を招來することを以て根本とし、まづ皇國を核心とし、日滿支の强固なる結合を根幹とする大東亞の新秩序を建設するに在り」といふことであつて、「之が爲皇國自ら速に新事態に即應する不拔の國家態勢を確立し、國家の總力を擧げて右國是の具現に邁進す」るといふことであつた。

このわづか數行の根本方針によつてもわかるやうに、およそ國防國家體制の根本といふものは、わが皇國の肇國當時の眞の姿に目覺めさへすれば、日本の脚下

に横つてゐるのである。燈臺下暗しの譬へのやうに、遠くナチスの空にばかり氣をうばはれてるが、よく注意して照せば、無限の光りを發する皇國の三千年の姿こそ、その精神において、まことの國防國家なることをしるのである。

たとへば、國防國家たるの要諦は、第一に、全體的國防國家觀の確立といふことがいはれ、第二に、政治の經濟に對する優位といふことがいはれ、第三に、統帥と國防との完全協調といふことがいはれてゐるのであるけれども、これら三つは、いづれも、その理念としての日本的世界觀の上から考へれば、まさに日本こそ、世界にも稀な模範的な「國防國家」であるはづなのである。たゞ、近世開國以來の政治情勢が、しばし自由主義・個人主義の洗禮による國勢伸張を已む得ぬこととしてやつてきてる間に、この肇國以來の偉大なるべき國體が見失はれかけ、近代的國防國家體制の整備において、やゝ後れかけてゐた事實は、爭はれないのである。支那事變までに五年も經過した昭和十五年（一九四〇年）夏ごろになつて、ともかくも、國防國家建設といふことが、當面の最緊急課題としてとりあげられたのは、支那の背後の英米等自由主義陣營を敵とする戰ひを意識するとき、現實の日本の國家體制は、總力戰を遂行する國家として、あまりにも整備されてゐなかつたからである。いまやその背後の敵を正面の敵とする大東亞戰爭に入るにいたつて、まだ〳〵つよく、ふかく、ひろく、うちたてねばならぬ不敗の態勢が要望されるのである。

× × × ×

からした根本方針をもつて、日本國防國家の國防および外交はどうあるべきかといふに、「內外の新情勢に鑑み、國家總力發揮の國防國家體制を基底とし、國

是遂行に遺憾なき軍備を充實する」ことが、その國防原則である。軍備が、國防國家確立のための最大かつ絶對の根本條件であることは、説明するまでもない、當然のことである。總力戰といふ言葉にごまかされて、軍備を他の諸要素と並列視すべきでない。「フランス敗れたり」の著者アンドレ・モーロアが、端的にいつてゐる――戰爭は、フランスに關するかぎり、開戰と同時に敗戰であつたといふことができる。何故に、フランスは敗れたか、といふに、十分なる飛行機、十分なる戰車、十分なる高射砲をもつてゐなかつたからである。またさうした不足を補ふべき十分なる工場をもつてゐなかつたからである。さらに、また、英佛は、陸軍が貧弱であり、かつ巨大なる人的並びに物的資源を急速に活用すべき何らの機構をもつてゐなかつたからである。」――まことに、思想も、經濟も、文化も、あらゆるものが强靱であることは、總力戰に對處すべき國防國家の要素でなければならないのであるが、軍備の强靱がなかつたならば、結局、なんにもならぬのである。軍備の遺憾なき充實こそは、國防國家の第一の絶對要件である。

日本國防國家の外交は「大東亞の新秩序建設を根幹とし、まづその重心を支那事變の完遂に置き、國際的大變局を達觀し、建設的にして、かつ彈力性に富む施策を講じ、もつて國運の進展を期する」ことにあると斷ぜられた。いまや、大東亞戰開始とともに、ドイツ及びイタリヤとの同盟ます〳〵かたく、この國防國家外交によつて、相ともに世界秩序建設に乘出しつゝある。

かうした國防と外交を整へるための國内態勢の刷新こそは、日本國防國家建設の重要なプログラムである。内政の急務は、國體の本義にもとづき、庶政を一新し、國防國家體制の基礎を確立するにあり、として、もろ〳〵の要件の實現が要請された。

第一は、道義的要件として、わが國體の本義に透徹する敎學の刷新と相まつて、己れひとりの利益に汲々たる自我巧利の思想を排斥し、國家奉仕を第一義とする國民道德を確立することが要請された。かやうな革新的な國家觀、世界觀、人世觀を基調とするのでなければ、國防國家はナンセンスである。國防國家は、立派な道義國家として立つところに、無限の力を發揮できるものである。

第二に、政治的要件として、强力なる新政治體制を確立し、國政の綜合統一を圖ることが要請された。國防國家における政治は、その力もつとも大である。國防國家においては、戰爭でさへもが、政治そのものと考へられる。强い政治力、これは、國防國家體制の核心でもある。そのために、まづ、官民協力一致各々その職域職分に應じて國家に奉公すること、すなはち「臣道實踐」といふことを基調とする新國民組織を確立することがあげられ、この歷史的任務を擔ふものとして、大政翼賛會が設立されてゐるわけである。つぎに、新政治體制に即應し得るやうな議會翼賛體制を確立することがあげられ、さらに、行政の運用に根本的刷新を加へ、その統一と敏活とを目標とした官界新態勢を確立することがあげられた。これらは、いづれも、困難な問題であるが、時局の進展とともに、少しづゝではあるが、實現をみつゝある。たとへば、もろ〳〵の政黨は、すでに自發的に解消して、翼賛議會態勢の完成に一致協力してきてゐるし、官界新態勢も官廳事務再編成とか行政簡素化とかの形で、具體化されつゝある。大東亞戰爭への突入をみたる以上、もつとテンポを早めて、實現しなければならぬ問題がまだ〳〵澤山あるはづである。

第三は、經濟的要件として、皇國を中心とする日滿支三國經濟の自主的建設を基調とする國家經濟の根基を確立することが要請された。大東亞戰爭と大東亞建

設の新情勢は、日滿支の外に、南方經濟圏をもふくめた雄大な構成をもつた大東亞自主的國防經濟の確立といふ課題を提起したわけである。この大東亞國防經濟の確立のためには、皇國みづからが、官民協力による皇道經濟の遂行、とくに主要物資の生產・配給・消費を貫く一元的統制機構を整備し、これを基軸として、綜合經濟力の發展を目標とする財政計畫や金融統制やの確立强化をはかり、世界新情勢に對應する貿易政策の轉換につとめねばならぬ。これとともに、國民生活必需物資、とくに主要食糧の自給方策の確立、重要產業、とくに重工業・化學工業・機械工業などの劃期的發展、科學の劃期的振興ならびに生產の合理化、內外の新情勢に對應する交通運輸施設の整備擴充などに努力せねばならぬ。かくてこそ、綜合國力の發展を目標とする國土開發計畫の確立、日滿支を一環とし大東亞を包容する協同經濟圏の確立といふことも、着々と具體化されることになるのである。

第四は、人口政策的要件として、强力なる國防經濟の根基を確立し、國防そのものの量的および質的强化を目標として、國是遂行の原動力たる國民の資質・體力の向上、ならびに人口增加に關する恒久方策、とくに農業および農家の安定・發展に關する根本方策を樹立することが、要請された。

第五は、社會政策的條件として、國策の遂行にともなふ國民犧牲の不均衡の是正を斷行し、厚生的諸施策の徹底を期するとともに、國民生活を刷新し、眞に忍苦十年、時艱克服に適應する質實剛建な國民生活の水準を確保することが要請された。

× × × × × ×

右にのべたことが、日本の國國防家建設の綱領のあらましのところである。か

うした根本國策の總論にもとづいて、その他のもろ〳〵の各論、經濟新體制確立要綱も、財政金融基本方策要綱も、日滿支經濟建設要綱も、國土計畫設定要綱も、科學技術新體制確立要綱も、勤勞新體制確立要綱も、人口政策確立要綱も、戰時貿易對策も、交通政策要綱も、ほとんど全部の具體的方策が大體決定されてゐた。大東亞戰爭にいたるまでに、日本の國防國家建設の根本方針が、かうして、あらまし、決定されてゐたことだけでも、われわれとしては、大に意をつよくするに足るともいへるであらう。

いはんや、たとへば、新政治體制としての大政翼賛會の組織や、經濟新體制確立要綱にもとづく重要産業統制會の組織や、勤勞新體制確立要綱にもとづく大日本産業報國會の組織や、科學技術新體制確立要綱にもとづく技術院の設置などのごとく、あげれば、數多くの發足活動が、あらゆる分野に、あらゆる姿で活潑に行はれつゝあることは、はなはだ心強いものがあるのであるが、諸般の情勢をみるとき、組織ができただけで、魂の入つてゐないものもすくなくない。「戰爭と建設」を完遂しようといふのには、その組織そのものが活き〳〵と動かねばだめである。組織は、要するに手段である。統制會の組織は、生産增强のための手段にすぎないし、技術院の設置は、科學技術の劃期的の躍進のための手段にすぎないし、大政翼賛會の組織は、國民各自の職域における臣道實踐によつて國政の圓滑なる遂行を確保するための手段にすぎない。われわれの脚下には、まだ〳〵解決せねばならぬ多くの國防國家的要請が、ころがつてゐるはづである。

總力戰は、いままさに、目の前に行はれつゝある。われわれは、この總力戰を遂行しつゝ、大東亞國防國家の建設を遂行しつゝあるのであるから、まことに、世界史上、いままでかつてない大事業にとりかゝつてゐるわけである。

大東亞建設の綱領

×

大東亞の建設方針は、大東亞戰爭がはじまると、いちはやく、さだめられた。

大東亞建設方策を確立するために、昭和十七年（一九四二年）の二月、はやくも、大東亞建設審議會といふ官民協力の國策審議機關が政府内に設けられた。そして、日本の大東亞建設計畫に對する雄大な構想が練られたのである。

大東亞建設審議會といふのは、内閣總理大臣を總裁とし、企畫院總裁を幹事長として、委員に、民間各方面の權威者三十名を網羅し、その後五十名に增員し、

「世界的變革に處する帝國百年の長計の確立およびこれと密接不可分なる大東亞共榮圏建設に關する重要事項の調査審議」にあたることになつた、稀にみる大がかりな審議機關である。本年二月はじめに設置すると、間髪をいれず、月末には、第一回總會を開いて、スタートした、内閣總理大臣からは四つの諮問（しもん）――大東亞建設に關する基礎要件はどうか、文教政策はどうか、人口政策はどうか、そして、經濟建設の基本方策はどうか、といふ四つの大問題が諮問され、審議會から、それ〴〵の答申が行はれた。そして、引きつゞき、さらに、經濟建設基本方策にもとづいた鑛工業電力建設方策と農林水畜産業方策と金融財政交易基本方策と交通基本方策の四つの問題も、追加諮問され、これに對しても、それ〴〵の答申がなされ、結局、これら八つの答申の中に、日本の今後すゝむべき大東亞建設への途は、まづ日本官民の總智慧をしぼつて結論づけられてゐるものとみることができ

るのである。

ことに、これらの答申案をつくるときは、審議會の中に、第一部會から第八部會まで、問題毎に部會が構成され、部會長には、それ〴〵所管の大臣が指命されて、官民一糸みだれぬ審議方法をとつたことは、はなはだ當を得た進み方で、喜ぶべきことでなければならぬ。これらの答申案は、大部分、單に一審議機關の答申たるにとゞまり、政府の國策としては確立されるにいたつてゐないけれども、その審議方針、審議機關の構成からみて、今後の大東亞建設國策の一大基準であり、指針となることは、疑ひないばかりでなく、かうした國策を中心にして、政府部内はもちろん、官民ともに、心を一にし、考へを一にして、頭を練つたといふこと、そのことだけで、すぐに、大きな政治的意義があるといふものである。

× ×

大東亞建設審議會の答申を通じて、大東亞建設の構想をうかがうと、二大別して、一般方策と經濟方策とに分けることができる。

一般方策は、建設基礎要件と文教政策と人口政策の三つであり、經濟方策は、その他の、經濟建設基本方策と鑛工業電力建設方策と農林水畜産業方策と金融財政交易基本方策と交通基本方策との五つである。

まづ、大東亞建設の基礎要件としては、「大東亞建設の基本理念は、わが國體の本義に則り、八紘爲宇の大義を、あまねく大東亞に顯現するに在り、これがため、各國および各住民をして、その分に應じ、各々その所を得せしめ、道義に立脚する新秩序を確立するをもつて要となす、」といふことが明示されたのである。

わづかこの數行の言葉であるが、その意味するところは、深くかつ大である。

大東亞新秩序の建設の端緒は、一言にしてつくせば、眞に大東亞的なるものの發見であり、眞に日本的なるものの展開であるといふことができる。そして、この發見し展開せるものを維持育成し、確立することでなければならぬ。米英蘭の搾取地帶たる舊秩序の中から、大東亞人の大東亞、アジア人のアジアといふ新秩序を建設するためには、かれらの舊統治體制を完全に拭ひ去り、これに代るべき建設の基本理念をしみこませ、米英の壓迫から解放された原住民の自覺を基調とした新秩序が確立するのでなければならぬ。

中心基調となるものは、いふまでもなく、八紘爲宇のわが肇國の精神である。肇國の大精神たる八紘をもつて宇と爲す本義を、大東亞全域に顯現することが、道義にもとづく大東亞運命共同體建設の礎石にほかならないのである。

しかも、大東亞建設は、ひとりわが皇國のみの責任といふべきではない。大東亞全域の原住民もまた、皇國を中核體とし、指導標として、それ〴〵の分に應じ、力に應じてこの大業にいそしまねばならぬ立場に立つ。だから、日本の大東亞建設といふことも、前に一言したやうに、それが、大東亞各地住民の共同目的たる事實を、各住民の自覺にもとづく信念として、確立せしめ、その共同目的達成のため、つよくしてかたい民族協力態勢を完成し、ともに苦しみ、ともに樂しむ精神のもとに大東亞各地各住民が、その總力を集中し、共同戰線たる建設工作によろこんで積極的に參加してくるやう、一切の施策を實行するのでなければならない。

それがためには、大東亞民族啓蒙運動といふことが強力に推進される必要もあるであらう。

だが、われわれのとくに注意せねばならないのは、大東亞總力戰態勢の確立と

いふことである。大東亞新秩序の建設が、成功するも失敗するも、一に係つて、大東亞總力戰勢態の確立、大東亞國防態勢の確立といふことにある。

大東亞建設は、同時に、大東亞戰爭であることを忘るべきでない。

大東亞全域の人的要素と物的要素を綜合的集中的に動員活用し、その總力を發揮せしめることは、大東亞戰爭遂行力を增强する最大の方途である。戰力の强化以外に戰爭に、勝つ方法はない。戰爭に勝つ以外に、建設を遂げる方法はないのである。

× × ×

大東亞建設に關する文教政策も人口政策も、要は、かうした大東亞建設の基本理念につゞくものでなければならぬ。

大東亞建設審議會の答申した文教政策は、その構想において二つの面をもつ。一面は、皇國民みづからに對する文教政策であり、一面は、大東亞各地各民族に對する文教政策である。

長年月の間、英米思想の文教政策によつて發展してきた日本が、この舊態勢から脫却して、みづからの能力とみづからの思惟とによつて、大東亞全體の甦生、建て直しにとりかゝつたのであるから、皇國民みづからの文教的再錬成は、絕對の要件であり、これなくしては、到底、大東亞の指導的地位に立ち得ないはづである。

だから、大東亞建設に關する文教政策の要點は、皇國民に對し、大東亞建設の道義的使命を體得せしめ、大東亞における指導的國民たるの資質を錬成するとともに、これに應じて、大東亞各地各民族に對し、かれらをして、各々その分に應

じ、その所を得しむるを本旨とし、それ〴〵の姿に即した教育・言語・宗教・文化の方策を確立するといふことにもとめられたのである。

具體的にいへば、わが國民の一人一人に、大東亞建設の國家的・歴史的必然性を自覺せしめ、大東亞の中心指導國民たるの資質を體得せしめることを中心目的とし、これがために、文武一如の精神を基とし、剛健高邁なる精神力を昂揚し、歴史教育の刷新、日本諸學に基礎を置く大學制度の再確立を圖り、大東亞的人材の育成に全力を集中する、といふのである。

この方針で、たとへば、國家計畫にもとづいた教育の運營、修業年限の短縮、文軍教育の統一、私立學校制度の改革、學校教育偏重の是正などから、當面の施策として、南方派遣要員に對する特別の錬成方策など、いろ〳〵の革新教育的な文教政策がまじめにとりあげられることになつてゐるのである。

さらに、大東亞建設に關する人口政策いかん、といふ政府の諮問に對する審議會の答申の內容が、例の基本國策要綱にもとづく人口政策確立要綱の趣旨を、さらに一歩前進したものとなつたことは、當然のことでなければならぬ。

その根本本針は、要するに、大東亞戰爭をあくまで遂行し、大東亞建設を完全に遂行すべき重大任務をもつわが皇國民を、量的に增加せしめるのみでなく質的にも向上せしめることを第一義とし、さらに、南方進出者の配置計畫やその資質の向上をはかり、また、大東亞全體の人口增强ねらふことにある。

わが皇國民の人口增强がなんといつても、大東亞建設の基軸でなければならないわけであるが、このためには、すでに政府として決定して、國民に發表濟みの、人口政策確立要綱の中にかゝげてある諸方策を、一段と强力に、實施しさへすればよいわけである。

大東亞の新天地を背負ふて立つ皇國民の量質兩面の增强向上は、絕對の要請なわけであるが、とくに、具體策として考へられてゐるのは、

農村人口として總人口の四割だけを確實に保有すること。

大都市への人口集中を防止し、むしろ積極的に疎開するやうにすること。

勤勞態勢を刷新し、とくに勞務者の保健施設を改善すること。

結婚と出生を大々的に奬勵すること。

生活必需物資の生產配給を改善すること。

結核の豫防・撲滅を本格的に實施すること。

母性および乳幼兒の保護を强化すること。

大體、かうした具體策がとりあげられたのであるが、これらは、すでに着々實施に移されつゝあることは、われわれのよく知る通りである。

大體、大東亞共榮圈は、人口的にみると、大雜把な數字であるが、

支那	四億人
印度	三億人
日本	一億人
滿洲	四二〇〇萬人
佛印	二三〇〇萬人
ビルマ	一五〇〇萬人
泰	一四〇〇萬人
フイリツピン	一三〇〇萬人
マレー	四〇〇萬人

といつた順序で、總計九億餘に上るのであるが、一億の日本人が、他の八億の大

東亞民族をリードしようといふのであるから、まことに、われわれとしては、責任の重大なことを思ふと同時に、やはり、量的に人口を增すことと質的に民族性を向上せしめることによつて、人口的にも、これら八億に對する大きな威力とならねばいかぬといふことになる。

ことに、數的には、わが大和民族に四倍もあり、質的にもわが民族に次ぐ優秀民族たるところの支那民族の存在が、大東亞建設上永久に大きな問題としてのこることを考へるときは、われわれとしても、ます〳〵、大きな覺悟が要るわけである。

× × × ×

さて、最後に、大東亞經濟建設基本方策であるが、これは、ある意味で、大東亞建設の最大課題であるといはねばならぬ。なぜなら、大東亞戰爭の直接の動因は、米英兩國がわが大東亞における皇國の發展を阻止し、とくに、經濟的壓迫を加へんとしたところにあつたからである。

日本が大東亞戰爭を遂行しつゝとくに南方經濟力を完全に把捉し吸收し消化して、大東亞國防經濟態勢を確立してしまふことが、大東亞戰爭に最後の勝利を得る所以であるのは、このためである。

大東亞戰爭は、大東亞建設のために遂行されつゝあるのであるが、大東亞建設は、この大東亞戰爭を勝利にみちびく唯一の途であるところに、わが皇國の當面する「戰爭と建設」の難關があるのであり、容易に突破しがたき難關であるだけ、これをわれわれの總力をあげて何年何十年の年月がかゝり、孫子の代までかゝるやうなことが豫測されやうと屁古垂れずあくまで突破することは、八紘爲宇の天

業をわれわれみづからの手によつて翼賛し奉ることになるのであつて、おもふだに、血湧き肉躍る心ひきしまることであるといはざるを得ぬ。

すなはち、大東亞經濟建設の目標は、大東亞建設の根本理念を、そのまゝ經濟面にしみこませ、八紘爲宇の大義を大東亞各地域に顯現し、道義にもとづく大東亞の經濟新秩序を確立し併せて新世界經濟の建設に積極的に貢献するにあるのである。

だから、この大目標を達成するためには、なんといつても、大東亞の綜合經濟力を發揮し、大東亞防衛に必要なる自主的國防經濟を完成することが、絶對に必要となる。そして、この「絶對の必要」を可能ならしめ、大東亞の綜合經濟力を完全に發揮せしめるためには、さきにのべた文教政策や人口政策とおなじやうに、中心責任者たる皇國みづからが、いつまでも、ユダヤ式利潤追求主義、自由主義

の經濟觀念で物をいぢつてゐるやうなことでは、絶對にいかぬ。國體觀念を明徴にし、積極剛健なる民族意志を昂揚し、直接開發に必要なる科學技術水準の劃期的向上をはからねばならぬ。しかも、皇國の指導下に立ち上つた大東亞各地各住民をして、大東亞新秩序の建設の成る成らないが、直接、自己の運命に大きな影響をあたへる大事實を自覺せしめ、この共同目的達成のために、ともに苦しみともに樂しむ心構へをもち、積極的にわが皇國の指導に協力挺身するやうにせねばならぬことが、とくに、經濟の上において、絶對に必要であることをよく〳〵認識させねばならないのである。

大東亞經濟建設のためには、その具體策として、農業や林業や水産や畜産をどうするか、鑛業や工業や電力やをどうもつてゆくか、大東亞の交通はどうか、そして、金融や財政や交易やをいかやうにとりあつかふかゞ、大きな問題と

なるわけであるが、その根本基調としては、まづ、右にのべたことで盡きるのである。

× × × × ×

皇國百年の長計としての大東亞經濟建設方策を考へるにあたつて、われわれは、現實に大東亞戰爭を遂行しつゝあるといふ當面の時局に照らして、こゝに南方經濟建設をどう考へねばならぬかといふ緊急焦眉の課題に思ひ至るのである。

南方の資源は、端的にいへば、大東亞戰爭の一面を資源作戰にもつていつた重大な契機となつてゐる。この南方資源、この南方經濟をいかに把握すべきか、といふことが、大東亞戰爭の完遂に、もつとも重要な關係をもつのである。

南方經濟をどうするか、の前には南方統治をどうするか、の問題がある。

これについては、第七十九帝國議會（昭和十七年一月二十一日）における東條首相の施政方針演說のなかで、いちはやく明かにされた方針がある。記憶されてゐる人もあらう。

香港と、マレーとは、帝國の大東亞防衛の據點として、直接統治下に置く。

フイリッピンは、大東亞建設に協力するならば、獨立の榮譽をあたへる。

ビルマは、ビルマ人のビルマ建設に協力する。

インドは、インド人のインド建設に協力する。

蘭印は、インドネシア民族をオランダの壓制より解放し、同地域をインドネシア民族安住の地とする。

濠洲・ニュージーランドは、帝國に對し抗戰を繼續するならば、これを擊碎し、住民協力し來るならば、その福祉と發展に協力する。

大體、かういつた方針であつた。

南方統治の方針は、その後、この大原則にしたがつて、着々進捗しつゝある。フイリッピンもビルマも、漸次、大東亞建設の一翼をになふにふさはしい姿を整へてきたやうである。

インドと濠洲およびニュージーランドだけは、いまだ、海のものとも山のものとも判然しないが、大勢は、すでに、その方向を決してゐるのである。

南方統治の方式として、皇國は、占領地域に軍政を施行し、廣大なる新國土における施政の統一保持につとめつゝある。軍の强力なる力で、「戰爭と建設」が推進されつゝあるわけである。

南方占領地の軍政は、地域的に陸海で分擔し、現地には、それぞれの軍司令官の監督以外に、格別の統督機關も置いてないが、「軍」政とはいへ、むろん、行

政の主體には、各省または民間から簡拔された優秀なる文官が、司政官として活躍するのである。かうした地方現地の軍政は、中央で統括する問題もあれば、地方かぎりで、現地軍間で協定してきめる問題もあり得るわけである。南方經營の基本事項は、いふまでもなく、中央において、民意をも徵した上で、きめるのであつて、この十一月一日から新設された大東亞省がさうした重要な役割にあたるのであるが、軍官民の連絡事項は、ます〳〵多くなるわけである。

さて、南方占領地の統治上の基本方針としては、當局の示したつぎの十大原則がはつきりしてゐる。

1、現地の事情に即するやうに行政を行ふこと

2、つとめて現地人を利用し日本人は樞要な地位にのみとゞまること

3、原住民の宗教を尊重すること

4、原住民に對しては恩威併用、いやしくも小乘的愛撫に隨しないやうにすること

5、敵國人に對しては、假借なき態度でのぞむこと

6、樞軸國人に對しては友好的態度でのぞむこと

7、華僑は十分に利用すること

8、現地住民に對しても相當の負擔を負はせること

9、進出邦人を嚴選、國策に反する行動をさせないこと

10、現地住民に對し、日本語の普及につとめること

以上は、昭和十七年（一九四二年）四月十一日陸軍省軍務局加藤中佐談として發表された「南方建設の大構想」のなかに示されたものであるが、その大部分はいはゞ常識的な原則で、今後とも、かうした心構へは、保持されねばならないところであらう。

× × × × ×

南方資源政策といふものを、「戰爭と建設」といふ觀點から考へることは、われわれのとくに心すべきことである。

大東亞資源政策の重要な一環としてみた南方資源も、現實には、戰爭しつゝ開發し、開發しつゝ戰爭せねばならぬ姿なのであるから、これを平時的な頭で考へたら大間違ひである。

南方資源に對する根本施策方針として、當局のまづ明示したのは、

第一、資源の確保、とくに戰爭遂行上絕對必要なる資源を積極的に確保すること

とで、大東亞戰爭の資源作戰的一面である。たとへば、石油・ゴム・銅・錫・

鉛・亞鉛・クローム・マンガン・ボーキ・サイド・ニッケル鑛・鐵鑛石・麻・キナなど、これである。

第二は、南方資源の敵側への流出阻止で、これは、戰爭前の敵側が、南方資源に對しては、わが國と同樣の依存關係にあつた事實に即應し、敵側を資源的に封鎖、壓迫しやうといふのである。これは、大東亞戰爭の重要な一性格といふべきで、かつて、日本を經濟的に壓服しようとかゝつた米英は、逆に、日本によつて經濟的壓服されるかどうかといふ重要な點である。

第三は、作戰軍の現地自活の確保といふことで、遠い海洋に散在する多數の島嶼に據る現地軍が、さらでだに逼迫するところの船舶によつて運ばれる物資に期待しなくなるだけでも、一つの大きな利點となるわけである。

第四に、現在存立する現地の企業をわが方に對して協力するやう誘導することで、これに成功するがどうかは、南方經濟建設の成否に關係する。ことに、「南方に支那あり」といはれる華僑の企業をうまく活用するだけでも、大きなプラスである。

大體、かうした四つの基本方針がとられたのであるが、南方資源の開發にあたつては、これもあれもの慾得式開發によらず、「戰爭と建設」の根本方針に則つた順位をさだめ、第一に、戰爭遂行に直接必要なる重工業資源、たとへば、石油・鐵・銅・錫などが、眞先に開發さるべく、ついで、わが國の需要に應じ漸進的に開發さるべきである、とされてゐるのである。

こゝで、とくに重要なのは、南方に存する過剩資源をどうするか、といふことである。これを一トン一リットルといへども、敵側に流出させぬやうにすることは、前言のやうに重要なこととして、さて、わが國の立場から、大東亞全體とし

て、これを、どういふ形で處理するか、といふ問題がある。

たとへば、砂糖・ゴム・錫・米などの過剰物資の處理については、さしあたり、つぎのやうな途が考へられ、あるものは、すでに、着々、實行されてゐるもののやうである。

1、貯藏して、有事に備へることは、なんといつても重要なことで、ストックのきくゴムとか錫とかについて考へられねばならぬ。

2、船腹次第で、他の大東亞地域たとへば滿洲支那方面に廻すことは、ある程度まで、砂糖などについて考へられる。

3、同じやうに、盟邦ドイツ・イタリヤに廻してやれる物資も考へられる。

4、用途の轉換で、たとへば、科學技術の動員によつて、砂糖のアルコール化、ゴムの高級潤滑油化、マニラ麻のインド産ジュート代用、コプラの燃料化など澤山ある。砂糖のアルコール化などが本格化すれば、現在日本で行はれてゐる馬鈴薯・甘藷のアルコール化の代用ともなり、馬鈴薯・甘藷をそれだけ餘計食糧に廻すことができることになる。

5、砂糖などについて、作付轉換といふことが考へられる。砂糖畠を棉花畠に轉換するなどである。これは、むろん、從來砂糖畠に、土着生活してゐた原住民の生活産業に影響する大問題であることなどについて、愼重な取扱は要いるであらう。

大東亞全體にまたがる産業立地の計畫については、大東亞建設審議會の前途の答申案においても、ある程度考へられ、また、基本國策要綱にもとづく日滿支經濟建設要綱においても、考へられたことであるが、大東亞建設の産業立地的狙ひとしては、大體、そんなところで盡きてゐるのではないかと思はれる。滿洲國に

ついては、鑛業および電力事業の劃期的振興、これを基礎とした適地の重工業および化學工業が考へられ、支那では、鑛業および鹽業の振興が重點で、棉花その他の特產物が重視される。南方に資源が豐富だからといつて、製鐵業・アルミ工業などの重要產業を南方諸域に起させることはいろ〳〵問題があるであらうが、さればといつて日本を第二の英帝國として、「世界の工場」化することも皇國百年の大計としては、考へものであらう。

なほ、こゝでとくに注意せねばならぬことは、從來、資源的考慮にもとづいて重視された國內の人造工業、たとへば人造石油、人造ゴムなど、アルミナ工業、貧鑛處理などの立場である。これらは、一寸考へると、南方資源の日本歸屬で、もう力をいれなくともいいやうに考へられさうであるが、なか〳〵さうはいかない。南方鑛物資源の確保が現實化するのには、「戰爭と建設」の今日、なほまだ〳〵先のことであること、海上輸送といふことが大きな問題であること、供給は增大したかもしれぬが、需要もまた、戰域擴大で大いに增大したこと、人造物には、性能上天然物より優秀なものがあること（たとへば、人造揮發油は航空機油として、天然揮發油以上である、人造ゴムも同樣）などの理由があるからである。

なほ、その外、大東亞建設、南方建設には、具體的問題が、無數にあるのであるが、あらましの輪廓をしめせば、以上のやうなことであらうと思ふ。

× × × × × ×

因みに、大東亞建設審議會は、その後、本年十一月一日大東亞省新設と同時に、同省に移管され、今後は、もつぱら、大東亞經濟建設の具體的な綜合方策の審議にあたることとなつてゐる。

ナチスにおける「戰爭のための建設」

×

およそ世界いづれの國でも「强い國」にならうと願はぬ國はなく、いづれの國でも「自由な國」にならうと望まぬ國はないであらう。

しかし、もと〳〵「强い國」、「自由な國」であつたのが、なんらかの事情で、不自由な國、强くない國にうらぶれた國なら、さうした願望はとくに熾烈なはづである。

その一番いい例を、われわれは、一九三三年（昭和八年）にナチスの國となつたドイツにみることができるのである。

ナチス・ドイツの指導者となつた當初のヒトラーの念頭には、一日も早く、一年でも早く、祖國ドイツをもとのように、「强い國」、「自由な國」としようといふことしかなかつた。彼みづから青春の命をかけて護らうとした祖國は、一たび戰敗國となるや、底知れぬまでのうらぶれ方を示し、情けないほどに「强さ」と「自由さ」をなくしてしまつたからである。

ヒトラーが、ナチス第七人目の黨員となつて、政治家たらんことを志したのは、母の死に際しても落さなかつた涙を祖國の沒落ぶりにはとめどなく落したといふ事實でもわかるやうに、祖國にもとのやうな「强さ」と「自由さ」とをとり戻したい一念からであつたとは、マイン・カンプフといふ自叙傳で、ヒトラーみづからハッキリいつてゐるのである。だから、この間のながい年月、苦しい茨の道を歩

んで、とう〳〵政府の首班にまでたどりついたヒトラーに、いまこそ、その渾身の力をふるつて、ドイツに「強さ」と「自由さ」とをとりもどさねばならぬといふ勇猛心が、ウツ然として、もりあがつたことは、十分想像のつくことである。

そして、ヒトラーが祖國に「強さ」と「自由さ」をとりもどす最善の道は、たゞ一つ、「戰爭のための建設」といふこと以外になかつたのである。

ナチス・ドイツは、ヒトラーの指導下に、ひたむきな精進をつゞけることになつた。その目標は、一切が、「戰爭のための建設」におかれてゐたのである。

しからば、ヒトラーは「戰爭のための建設」といふことをどういふ風に考へたのか。どうして、これを絶對唯一のドイツ復興策と考へたのか。

それは、説明するまでもないことである。

ヒトラーは、前の第一次世界戰爭で、ドイツがどういふ戰爭の仕方をしたか、なぜ敗戰の憂目をみねばならなかつたか、その後の世界、とくに歐洲の情勢はどうか、といつた點を精細に反省し、研究した結果、結局、さういふ結論に達したまでのことであつたのである。

前の第一次世界戰爭は、ナチスにとつては、建設の絶好の活資料であつたわけである。

× ×

一九一四年（大正三年）八月に勃發した戰爭は、四年過ぎても、なほ勝敗が決しなかつたが、陸上におけるドイツ軍は、大體において各戰線とも終始有利な戰鬪をしてゐた。とりわけ、一九一八年（大正七年）三月に西部戰線においてこゝろみられたドイツ軍最後の總攻擊のごときは、まことに、はな〳〵しいものがあつ

た。攻撃また攻撃、突進につぐに突進をもつてせるドイツ軍は、またたく間に、英佛聯合軍の聯絡を遮斷し、アミアン近くまで迫つた。英軍は、はやくも、本國めざして退却の準備をはじめ、佛軍は、首都パリー防禦のために集結をはじめつゝあつた。ドイツ得意の長距離砲陣がパリーの表玄關をねらつて、一切の準備を完了さへしてゐたのである。

ドイツ軍の決定的な勝利は、もはや疑ふべからざることのやうにおもはれた。その上、ドイツ本國内は、事實上、敵軍の一兵の侵入に對してさへ、完全に防護されてゐた。全世界戰雲漠々と稱されながらも、四ケ年善戰のドイツに、やうやくにして勝利の女神が微笑みかけてゐたかのやうに、すくなくも戰線の表面はなつてゐたのである。

しかるにもかゝはらず、ドイツは、結局、あのやうな慘ましい敗戰國となつてしまつたのである。

戰爭の四ケ年間、終始、勇敢な一歩兵として、第一線に活躍した若き戰士アドルフ・ヒトラーにとつて、勝ちつゝ敗れた自己の祖國の姿は、いひしれぬ悲しみであつた。鋭敏多感な彼の胸奥深く、この慘ましい事實のよつてきたれる原因の一つ一つが、いとも克明にきざみつけられたことは想像に難くないのである。

ヒトラーが、まもなく、苦難な政治生活への徹底的活動を決意したのも、要するに、この祖國の慘ましい沒落の姿を眼のあたりまざ〳〵とみせられるとともに、そのよつてきたれる原因の實相がつぶさに、鋭い眼でみとゞけられ、敏い耳できゝとゞけられたからにほかならない。

一擧にしてネグロ國なみに沒落してしまつたドイツ帝國、祖國をもとのやうに雄々しく起ちあがらせよう、もう一度もとのやうに強い、自由な國にしよう。それ